

里庄町埋蔵文化財発掘調査報告 1

里見山中遺跡

宅地造成工事に伴う発掘調査

2014

岡山県里庄町教育委員会



窯1全景（南から）

巻頭図版 2



1 窯 1 第2床面（北から）



2 窯 1 第1床面（北から）

序

里庄町は岡山県の南西部に位置し、瀬戸内地方特有の温暖な気候と「原子物理学の父」仁科芳雄博士の生誕地として知られる自然と文化が豊かに調和した町であります。「町民と創る住みやすさ、やさしさが実感できるまち里庄」をキャッチフレーズに、住民の方々に、住んでよかった、これからも住み続けたいと思っていただけるようなまちづくりに取り組んでおります。

備中と備後の国境に近いこの地域は経済・文化の交流が盛んで、古くから交通の要衝として栄えてきました。近年もJR山陽本線、国道2号、山陽自動車道が町内に整備されるなど、その役割はなお一層重要となっており、我が国の流通経済の拡大とともに、急速な宅地化も進行するなど発展を遂げてまいりました。

ここに報告書を作成しました里見山中遺跡も、宅地造成工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、当初の予想を上回る重要な遺構と遺物が見つかり、なかでも瓦質土器を焼成した窯跡の発見は、当時の人々の生活や周辺地域との交易の様子を探るうえで貴重な手がかりとなるにとどまらず、里見地区に古くから伝わる伝統工芸品「大原焼」のルーツの解明にも資するものと期待されるところであります。

この報告書が学術研究に寄与するだけでなく、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の研究のための資料として広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成に際して、岡山県教育庁文化財課、岡山県古代吉備文化財センターをはじめ、株式会社不動産ギャラリー、岡山理科大学などの関係機関並びに地元の皆様からご指導とご助力にあずかりました。厚くお礼申し上げる次第でございます。

平成26年3月

里庄町教育委員会
教育長 杉 本 秀 樹

例　　言

- 1 本書は、宅地造成工事に伴い、株式会社不動産ギャラリー（倉敷市中庄1920-43 代表取締役 矢田良二）と里庄町の委託契約に基づき、里庄町教育委員会が実施した里見山中遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 里見山中遺跡は岡山県浅口郡里庄町大字里見字山中1483ほかに所在する。
- 3 平成15年発行『改訂 岡山県遺跡地図〈第4分冊 井笠地区〉』では当該遺跡は名称未定（里庄町No41）であったが、調査地の字名から「里見山中遺跡」とした。
- 4 確認調査は平成24年度に岡山県古代吉備文化財センター職員石田爲成の派遣を依頼し、その指導のもと里庄町教育委員会が実施した。発掘調査は、平成25年度に岡山県古代吉備文化財センター職員島崎東・柴田英樹・物部茂樹・石田・山本原也の派遣を依頼し、その指導のもと里庄町教育委員会が実施した。調査面積は確認調査が74m²、発掘調査は559.2m²である。
- 5 本書の作成及び編集は岡山県古代吉備文化財センターの山本が担当した。執筆は島崎・柴田・物部・石田・山本が分担して行い、文責はそれぞれの文末に示した。
- 6 本書に関する遺物・遺構のうち、以下の分析・測定については、次の諸氏に協力いただき、有益な御教示と報文をいただいた。記して御礼申し上げる。

胎土分析 白石　純（岡山理科大学）

熱残留地磁気年代測定 畠山唯達（岡山理科大学情報処理センター）

- 7 放射性炭素年代測定については、（株）加速器分析研究所に委託し、実施した。

- 8 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。

- 9 本書に関連する出土遺物ならびに図面・写真等は、里庄町教育委員会（浅口郡里庄町里見1107-2）が保管している。

凡　　例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高で、遺構全体図及び遺構図が示す北方位は磁北である。
- 2 報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。
- 3 遺構番号は、遺構の種類ごとに1から通し番号を付けている。
- 4 遺物番号は遺物の種類ごとに1から通し番号を付けている。土器以外のものについては、その材質を示すため番号の前に次に示す略号を付した。

土製品：C　　石製品：S　　金属製品：M

- 5 掲載した遺構図に示した網掛けは以下の範囲を示すものである。



弱い被熱痕



強い被熱痕

- 6 土層断面図に使用した土色は、基本的に『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修）を参考にした。

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 発掘調査及び報告書作成の経過 1

第2章 地理的・歴史的環境 3

第3章 調査の成果

第1節 調査区の概要 5

第2節 遺構と遺物 7

1 窯 7

2 挖立柱建物 14

3 埋甕 14

4 土坑 15

5 被熱面 19

6 溝 20

7 段状遺構 22

第4章 自然科学的分野における分析・測定

第1節 里見山中遺跡出土土器の胎土分析 23

第2節 里見山中遺跡窯1の古地磁気学的測定 25

第5章 総括 27

図版

報告書抄録

図 目 次

第1図 確認調査トレーン配置図 (1/1,200).....	1	第10図 窯1出土遺物① (1/4)	11
第2図 里庄町の位置 (1/2,000,000)	3	第11図 窯1出土遺物② (1/4)	12
第3図 遺跡周辺図 (1/30,000)	4	第12図 窯1出土遺物③ (1/2・1/4)	13
第4図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)	5	第13図 挖立柱建物1 (1/100)	14
第5図 柱穴1出土土器 (1/4)	6	第14図 埋甕1 (1/20)・遺物 (1/8)	14
第6図 遺構全図 (1/300)	6	第15図 土坑7 (1/30)	16
第7図 窯1 (1/50)	8	第16図 土坑7出土遺物 (1/4)	17
第8図 窯1 第1床面 (1/20)	9	第17図 土坑13出土遺物 (1/4・1/6)	19
第9図 窯1 第2床面・焚口の石裏面 (1/20)	10	第18図 溝1 (1/50)	20

第19図 溝1出土遺物 (1/4)	21	第26図 窯跡と道跡出土土器の比較 (K-Ti)	24
第20図 段状遺構1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	22	第27図 窯1から採取した6ブロック18試料の古地磁気 方位(黒丸)と平均(白印)	26
第21図 窯1器種別の比較 (K-Ca)	24	第28図 水年変化曲線2種	26
第22図 窯1器種別の比較 (K-Ti)	24	第29図 内耳跡口縁部分類	27
第23図 窯跡の比較 (K-Ca)	24	第30図 主要3番種縞年図	29
第24図 窯跡の比較 (K-Ti)	24	第31図 窯1復元図 (1/50)	30
第25図 窯跡と道跡出土土器の比較 (K-Ca)	24		

卷頭図版目次

卷頭図版1 窯1全景(南から)

卷頭図版2—1 窯1 第2床面(北から)

—2 窯1 第1床面(北から)

図 版 目 次

図版1—1 調査地遠景(北西から)	
—2 調査区I区全景(南から)	
—3 調査区II区全景(東から)	
図版2—1 窯1の堆積(北東から)	
—2 窯1 第2床面(東から)	
—3 窯1土器出土状況(南から)	
図版3—1 挖立柱建物1(東から)	
—2 埋廐1(南から)	
—3 土坑7(東から)	

図版3—4 溝1(北西から)	
—5 段状遺構1(北から)	
図版4 窯1出土遺物①	
図版5 窯1出土遺物②	
図版6 窯1出土遺物③	
図版7 土坑7出土遺物	
図版8—1 土坑13出土遺物	
—2 溝1出土遺物	
—3 段状遺構1出土遺物	

写 真 目 次

写真1 調査地遠景(北から)	5	写真3 昭和60年前後の妹尾勘次郎窯	30
写真2 柱穴1(南から)	6		

表 目 次

表1 文化財保護法に基づく文書一覧	2	表3 放射性炭素年代測定結果	28
表2 窯1出土土器点数	27		

第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

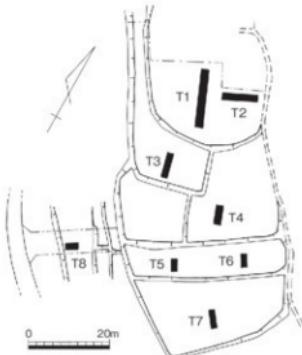
第1節 調査に至る経緯

調査地は、浅口郡里庄町大字里見地内にあり、北側の山塊から南東方向に伸びる丘陵の尾根上に位置する。この丘陵の頂部付近は、周知の埋蔵文化財包蔵地である名称未定の散布地（里庄町No41）にあたるが、約3,000m²にわたって宅地造成工事が計画され、里庄町教育委員会は事業者である株式会社不動産ギャラリー（以下、事業者）から平成25年2月20日付けで文化財保護法第93条の規定に基づく届出の提出を受けた。町教委は県教育庁文化財課の指導のもと、埋蔵文化財の取扱いについて事業者と協議を行い、まず遺跡の内容や範囲を確認するために確認調査を実施することとした。確認調査は里庄町教育委員会が主体となり、平成25年3月25日から29日にかけて実施した。なお、調査にあたっては県古代吉備文化財センターから調査員1名の派遣を受けている。確認調査は第1図に示したとおり、工事予定地内に8か所の調査区（T1～T8）を設定して行った。丘陵頂部付近に設定したT1～T3では、中世の土坑や溝、柱穴等の遺構を検出し、集落等の遺跡の存在を確認した。その他の調査区（T4～T8）では、遺構・遺物とともに検出されず、丘陵南側や西側の斜面部には遺跡が広がらないことが判明した。

確認調査の結果を受けて、県教委の指導のもと町教委と事業者で再度協議を行ったが、当初の計画通りに開発を実施することとなった。そのため、確認調査で遺跡の存在が明らかになった範囲については発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとし、県教育委員会は平成25年4月16日付け、教文理第112号で事業者に発掘調査を指示した。

発掘調査は里庄町教育委員会が主体となり、平成25年4月25日から5月31日にかけて実施した。発掘調査にあたっては、町教委が県古代吉備文化財センターに調査員の派遣を依頼している。なお、遺跡名については当初未定であったが、調査地の字名から里見山中遺跡と呼称することとした。

(石田)



第1図 確認調査トレーンチ配置図 (1/1,200)

第2節 発掘調査及び報告書作成の経過

発掘調査は、559.2m²を対象として実施した。調査期間は平成25年4月25日から5月31日である。I区・II区ともに重機を使って表土を除去し、遺構の検出や掘り下げは人力で行った。適宜実測・写真

第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

撮影を行い、5月31日にはすべての調査を終了した。

報告書の作成については、調査終了後に里庄町教育委員会が主体となって行い、遺物整理等の作業は、町教委が依頼し、調査担当者が岡山県古代吉備文化財センターで実施した。

遺物整理は、検出した遺構ごとに順次復元・実測・浄写・写真撮影を行った。遺構整理は、実測図を基に下図を作成して浄写を行った。その後、遺構・遺物の検討と評価を行いながら、原稿の執筆と編集作業を行った。整理作業の節目には、調査担当者による報告書編集会議を開催した。(山本)

発掘調査及び報告書作成体制

里庄町教育委員会

教育長	杉本 秀樹
事務局長	妹尾 素典
事務局長補佐（指導主事）	榎木 康男
主査	淡路 尚久
主査（社会教育主事）	鈴木 達也
主任	清水智香子
主任	大西 博之 (調査担当)
主事	

岡山県古代吉備文化財センター

所長	平井 泰男
次長（総務課長事務取扱）	大崎 智浩
参考事	光永 真一
総括参考事（調査第一課長事務取扱）	鳥崎 東（調査担当）
（調査第一課）	
総括副参考事（第一班長）	柴田 英樹（調査担当）
主任	石田 炳成（調査担当）
総括主幹（第二班長）	物部 茂樹（調査担当）
主事	山本 原也（調査・整理担当）

調査協力者

伊藤 晃・大橋雅也・鈴木康之・本田貴士・間壁忠彦

表1 文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財発掘の届出（法第93条）

進捗日付 文書番号	遺跡の名称・時代・種類 所在地	目的	届出者	届出日	指示の日付 岡山県文書番号	指示事項
平成25年2月22日 里教委第209号	名称未定（里庄町41） 中世・近世 敷石地 〔浅口郡里庄町大字里見所在〕	宅地 造成	事業者	平成25年2月20日	平成25年4月16日 教文理第112号	発掘調査

埋蔵文化財確認調査の報告

日付 文書番号	遺跡の名称・時代・種類 所在地	面積 (m ²)	原因	周知・周知外	包蔵地 の有無	調査を行った 地方公共団体	調査期間
平成25年4月8日 里教委第167号	名称未定（里庄町41） 中世 葉落跡 〔浅口郡里庄町大字里見所在〕	74	宅地造成	周知	有	里庄町	平成25年3月25日～ 平成25年3月29日

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

進捗日付 文書番号	遺跡の名称・時代・種類 所在地	面積(m ²)	原因	調査を行った 地方公共団体	調査期間
平成25年4月25日 里教委第280号	名称未定（里庄町41） 中世 葉落跡 〔浅口郡里庄町大字里見所在〕	530	宅地造成	里庄町	平成25年4月25日～ 平成25年5月31日

文化財認定（法第102条）

認定の日付 岡山県文書番号	物件名	発見の場所 遺跡の名称	発見日	認定者	発見者	土地 所有者	保管場所
平成25年4月2日 教文理第9号	土師器、瓦質土器 計整理箱1箱	浅口郡里庄町大字里見字山中 1483、1485-2、1486-2 名称未定（里庄町41）	平成25年3月25日～ 平成25年3月29日	岡山県教育 委員会	里庄町教育委員会 教育長 杉本秀樹	個人	里庄町教育 委員会
平成25年6月7日 教文理第365号	弥生土器、瓦質土器、陶磁器、銅錢 計整理箱60箱	浅口郡里庄町大字里見字山中 1483、1484-2、1485-2、1486-2 里見山中遺跡	平成25年4月25日～ 平成25年5月30日	岡山県教育 委員会	里庄町教育委員会 教育長 杉本秀樹	事業者	里庄町教育 委員会

第2章 地理的・歴史的環境

里見山中遺跡は、岡山県南西部の浅口郡里庄町大字里見字山中に所在している。明治38（1905）年に里見村と新庄村の合併により里庄村が発足し、昭和25（1950）年6月1日に町制を施行して里庄町となった。現在は東半部を浅口市、西半部を笠岡市と接している。町北部には阿部山塊の南辺にあたる虚空藏山（258m）、南部には竜王山塊の北辺にあたる毛野無羅山（205m）や茶臼山（192m）があり、その間は断層によって形成された北東—南西方向の谷地形（鴨方地溝帯）となっている。この谷地形の中でも現在里庄町役場付近の標高がやや高く、東流する里見川と西流する新庄川の分水嶺となっている。両河川は水量の少ない天井川であり、瀬戸内海気候にみられる降水量の少なさと相まって、周辺には古くから溜池が発達している。

里庄町に関わる記述は平安時代中期に編まれた『和名類聚抄』の「辯師郷（林郷）」が初出とされる。以後、鎌倉時代には「里見莊」、室町時代には「泉涌寺文書」にみる「口林莊」、「吉備津宮總解文」にみる「口林郷（庄）」と呼ばれる。近世になると現在の里見地区は口林村となり、岡山藩領を経て、寛文12（1672）年に鴨方藩領となった。一方、新庄地区は新庄村、浜中地区は浜中村となり、元和元（1615）年より揖津麻田藩領となった。

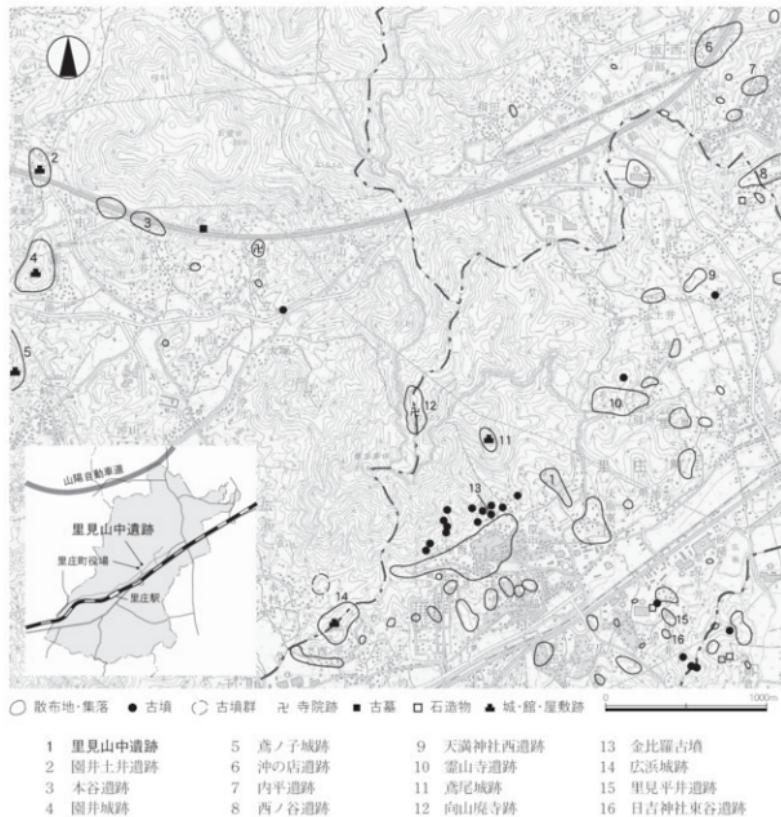
町内ではこれまでに発掘調査が行われたことはない。旧石器時代から縄文時代の遺跡は現在まで知られていないが、町周辺を概観すると旧石器時代では浅口市鴨方町益坂の和田遺跡、笠岡市片島の汐ヶ鼻遺跡群や下浦遺跡群、縄文時代では笠岡市西大島の津雲貝塚や原貝塚、浅口市金光町占見新田の加賀池遺跡等が知られる。弥生時代になると、里庄町新庄の昭和池周辺で中期後半から後期前半の土器やサスカイト塊が採集されており、集落の存在が想定されるようになる。古墳時代の集落については不明瞭ながら、横穴式石室をもつ古墳群が里庄町里見に形成され、継続的な造墓活動が窺える。このうち金比羅古墳⁽¹⁾は全長9.1mの横穴式石室をもち、耳環と鉄塊が出土したと伝えられている。向山廐寺⁽²⁾では布目瓦が採集されており、古代の山岳宗教に関連した遺跡と考えられる。

中世では、里庄町里見の靈山寺遺跡⁽³⁾や里見平井遺跡⁽⁴⁾で亀山焼の散布が認められる。亀山焼は、倉敷市玉島の丘陵一帯で生産された須恵器の系譜をひく土器である。浅口市鴨方町小坂西の沖の店遺跡⁽⁵⁾では、土師器椀・皿を焼成した窯の検出や多量の中近世土器の出土が特筆される。笠岡市園井の園井土井遺跡⁽⁶⁾や笠岡市今立の本谷遺跡⁽⁷⁾は中世の集落・館跡である。中世山城は、大内左京大夫義隆の城代、井上伯耆守春忠の出城と伝えられる鳴尾城跡⁽⁸⁾、毛利氏が備中進出を企図して家臣寺十郎左衛門尉に与えたとされる広浜城跡⁽⁹⁾がある。

近世になると、沿岸部では干拓や埋め立てによって陸地化が進められ、岡山藩によって岡山城下と福山城下を結ぶ鴨方往来（浜街道）が整備された。里庄町新庄の磯千鳥酒造は宝暦元（1751）年の創業で、主屋と酒蔵の北側部分が創業当時



第2図 里庄町の位置 (1/2,000,000)



第3図 遺跡周辺図 (1/30,000)

の建築であるという。里庄町浜中には仁科芳雄博士生家が保存されており、江戸時代後期の庄屋建築として貴重である。

里庄町里見の大原を中心として無釉で土師質・瓦質の「大原焼」が生産されてきた。明治・大正期には隆盛を誇り、明治18(1885)年の『府県陶器沿革工伝統誌』によると「里見村ハ工人350余名ニシテ其窯モ亦11所」あったという。焰燒を主力製品とした他、胡麻煎り・土鍋・火鉢・風呂くど・焜爐・竈・茶釜・土瓶・火消し壺・行平等の火に関わる生活雑器、タコ壺・ハゼ壺等の漁具、壺・甕・宝殿・灯籠、五重塔等を生産していた。しかし、生活様式の変化に伴って次第に生産が縮小し、昭和60(1985)年をもって伝統的な意味での大原焼は終焉を迎えた。

(山本)

主要参考文献

- 石田寛(編) 1978『岡山県の地理』
坂本輝正 1990『大原焼』里庄町制施行四十周年記念出版、里庄町
里庄町誌編纂委員会(編) 1971『里庄町誌』

第3章 調査の成果

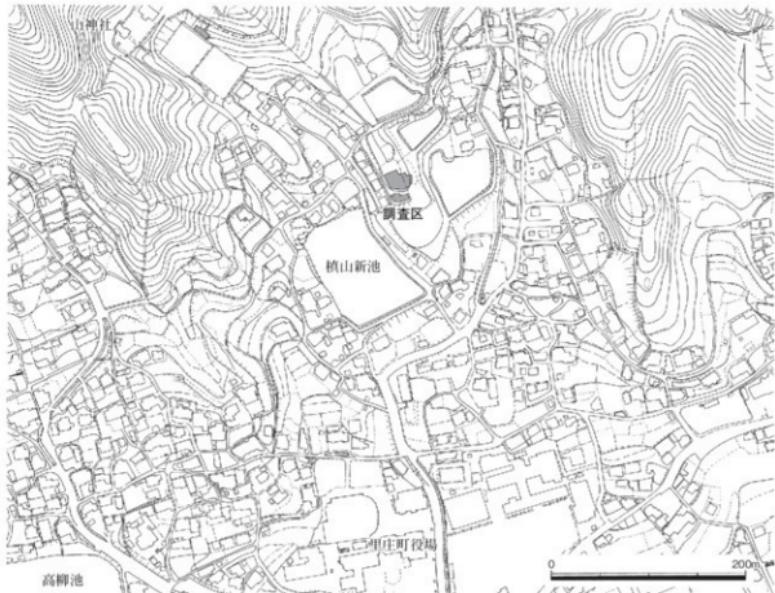
第1節 調査区の概要

調査区は、南東方向に舌状に延びる低丘陵尾根上に位置する。この尾根の西側の谷に入った所に大原焼と関係が深い「山神社」がある。また、調査地から南西方向に600mの地点に大原焼の粘土を採取したと言われる「高柳池」が所在する。

調査区北側の尾根頂上部の標高は約40mで、そのすぐ西側山裾との比高差は8mほどで、周囲の尾根よりかなり低い印象を受ける。尾根上は比較的幅が広くなだらかであるが、その部分



写真1 調査地遠景（北から）

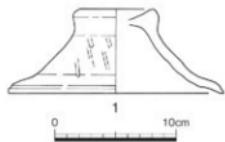


第4図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)

の調査区をI区とした。I区の南側の一段下がった畠地の調査区をII区とした。I区とII区の段差は最大で1.2mほどある。どちらの調査区も大部分が耕作土を除去すると地山となる。I区で検出された遺構は、窯1基、掘立柱建物1棟、土坑7基、溝5条、埋甕1基、被熱面1面、段状遺構1基、柱穴数個である。柱穴1以外は16世紀以降の遺構と考えられる。

柱穴1は溝1底面で検出され、埋土中から第5図の弥生時代中期の蓋1が出土した。溝1により削平された部分を考え合わせると、柱穴1の規模は直径約40~50cm、深さ60~70cmと推定される。周辺

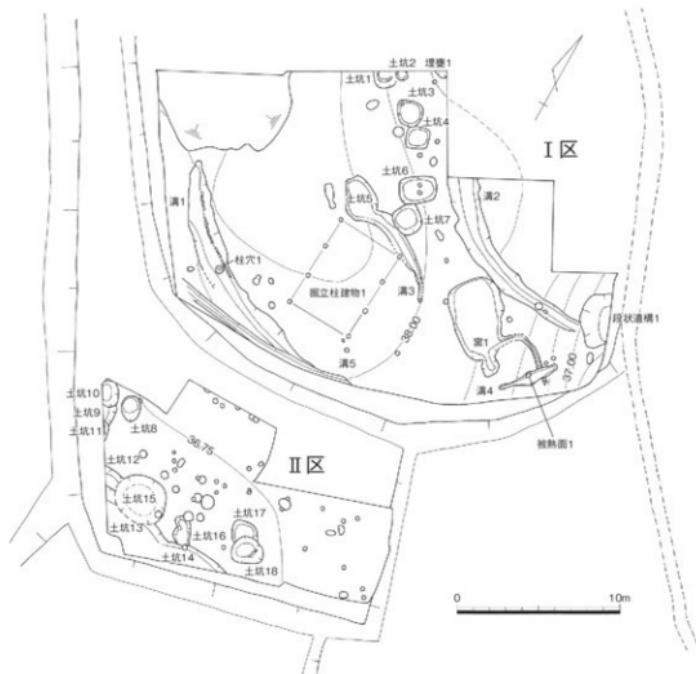
を精査したが、同様な柱穴は確認できなかつた。II区で検出された遺構は、土坑11基と柱穴で、時期は16世紀以降である。(物部)



第5図 柱穴1出土土器 (1/4)



写真2 柱穴1 (南から)



第6図 遺構全体図 (1/300)

第2節 遺構と遺物

1 窯

窯1（第7図～第12図、図版2・4～6）

窯1は、尾根頂部先端の東斜面に位置する煙管状窯である。付属施設として、前面に取り付く土坑と排水溝を検出した。周囲で柱穴を検出したが、窯に関係する建物等は確認できなかった。

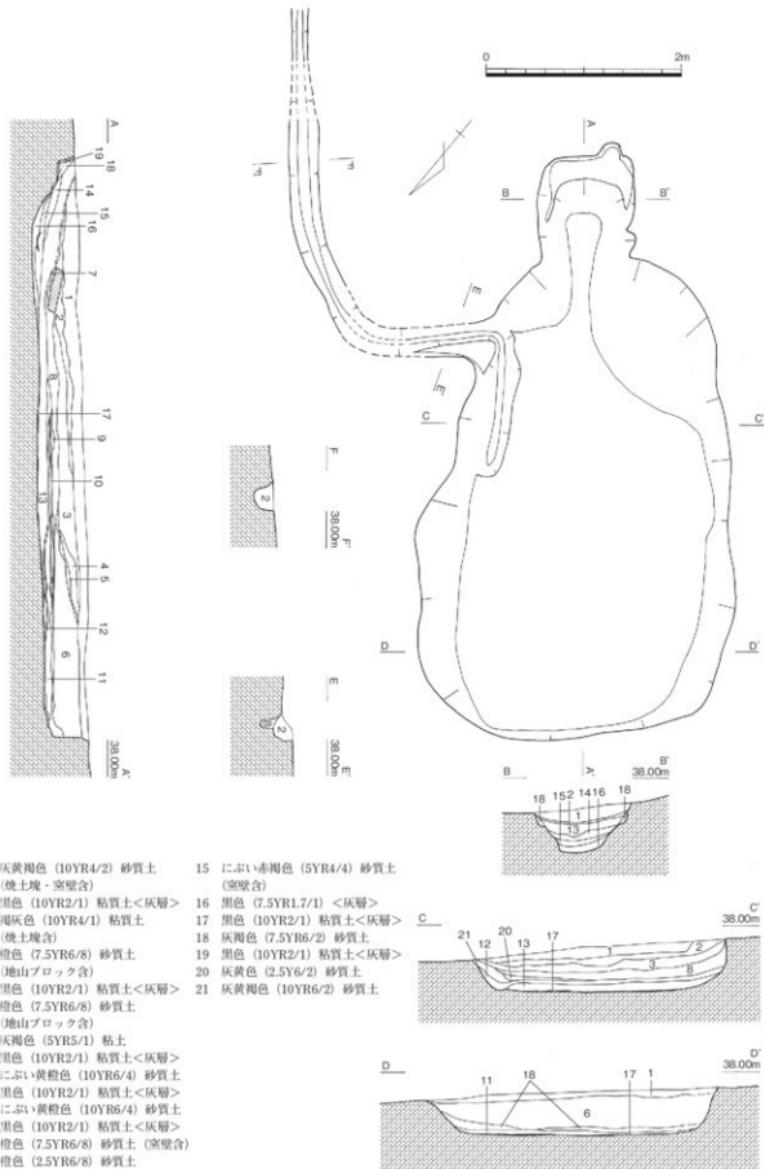
窯体は、標高37.68mで検出された。すでに上の焼成部は無く、燃焼部、焚口、前庭部を確認した。主軸方向はN-142°-Wで、地山の等高線に対して斜交する。焚口は、丘陵上方となる北西に向き、土坑内に開口する。床面は大きく2面確認でき、それぞれ構造が異なる。

第1床面の燃焼部掘り方は、横断面が逆台形を呈し、段も認められる。奥壁幅は90cm、高さは45cmを測る。床面はほぼ水平で、奥壁傾斜角は36°である。下段の側壁が北西に向かって狭くなり、外側へ開く屈曲部から床面高が土坑へ向かって高くなるので、この部分を焚口と考える。上段壁面には、貼り付けた粘土が残る。推定できる燃焼部は、上面で幅85cm、奥行き117cmの平面長方形を呈するが、下段は楔形を呈する。側壁に石等の使用、床面に間仕切り等は確認できない。下段南西隅の小穴（径20cm・深さ12cm）は、焼成部の構造に関係する可能性もある。被熱による底面の変化は小さいが、壁面は中段まで黒色や赤色、上段の粘土は硬化し灰色を呈する。前庭部は、最大幅47cm、左側壁で長さ51cmを測る。床面傾斜角度が6°あるため、土坑床面は燃焼部より8cm高くなる。なお、掘り方上面の南西隅付近に突出する部分を確認したが、その性格は不明である。

第2床面は、第1床面より29cm高い。燃焼部は、奥壁幅90cm、高さ24cmを測る。傾斜角16°の奥壁に続き、床面も緩やかに傾斜し、焚口を境に15cm低い前庭部の窪みに移行する。右側壁には、貼り付けた粘土、立てられた2個の石や抜き取り穴が残り、左側壁にも抜き取り穴が認められる。推定できる燃焼部は、幅97cm以上、奥行き68cm以上の平面台形に近い部屋に、長さ24cm、幅28cmを測るトンネルが取り付く形態である。底面と奥壁南側一部は被熱により硬化し、黒色を呈する。前庭部は窪み、溜まった灰層上で板状の石が出土した。石の焚口方向上辺部分が被熱で赤色を呈していることから、操業途中に間仕切り等として置かれた可能性がある。また、石の裏面には、一辺26cm程度の方形を呈する被熱範囲が認められる。ある段階の焚口の蓋であった場合には、焚口立面形を反映していると考える。なお、埋土からは、厚さ8cm以上を測る窯上部の窯壁片が出土している。

土坑の平面形は、長楕円形を呈する。当初の床面は中央付近が低く、壁面はまっすぐ立ち上がる。規模は、長さ480cm、幅322cm、深さ50cmを測る。橙色砂質土は整地土で、大きく3回の床面改修が認められる。13層は、窯体から土坑中央に施された厚さ10cm程度の層で、壁際の床面を低くしている。第2床面に伴う4・6層は、土坑北側に施され、その結果、前庭部付近の床面が低くなる。窯から排出した灰層は、第2床面では多く残り、第1床面ではわずかに残る程度である。第2床面の灰層上の1・3層は、焼土塊や土器片を多量に含み、3層は床面整地を兼ねた可能性がある。この土坑は作業場と考えられ、土層で見ると、床面改修は3～4回、焼成は少なくとも7回確認できる。

排水溝は、土坑床面の南東辺に沿って掘削され、直角に曲がって土坑外の東斜面に向かうが、再び屈曲して南へ延びる。下方の段状構造1などへの排水流入を防ぐための構造と見られる。断面形は「U」

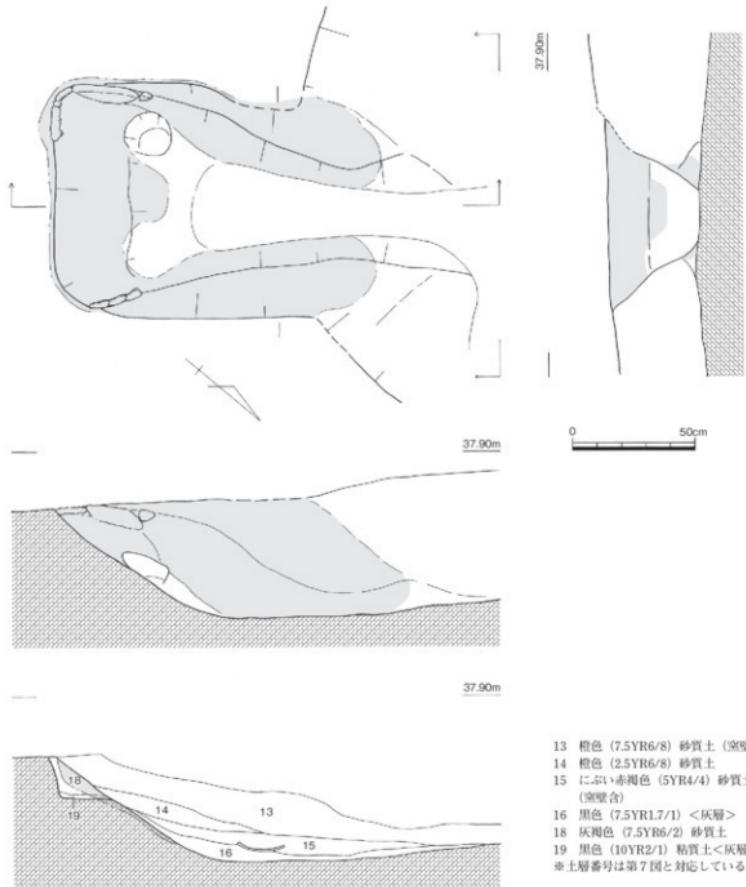


第7図 窯1 (1/50)

字形である。幅は30cmを測り、土坑内の北端では床面から2cm程度低く、土坑外では検出面から20cmの深さである。底面の標高は、土坑内北端で37.32m、南端で37.17mである。(柴田)

窓1からは整理箱27箱分の土器片が出土した。大半は土坑と排水溝からであり、窓体内からは小破片がわずかに出土したにすぎない。調査期間の問題から明確な層ごとに取り上げることができておらず、分かるものに限って大まかに「上層」「中層」「下層」「排水溝」の4つに区分して掲載番号と併記している。焼成は瓦質を基本とするが、中には須恵質・土師質と呼びうるものもある。

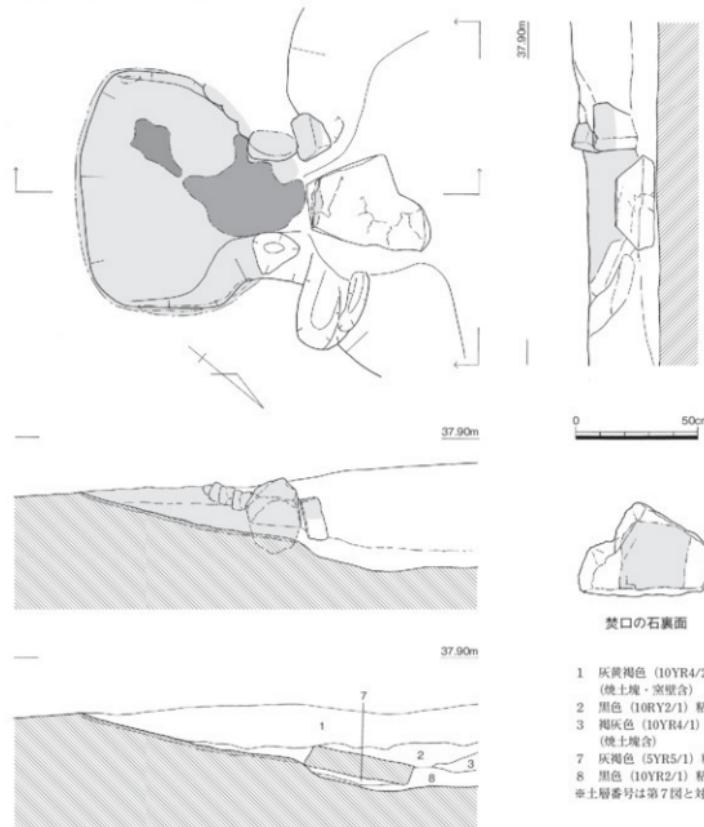
2~9は皿である。7の内面にはハケ目調整が顯著で、8・9は口縁部を屈曲させて外に開く。10は備前焼の壺である。11~13・15~18は鉢で、17・18は大原焼でいう「手ぼうろく」に相当する。19



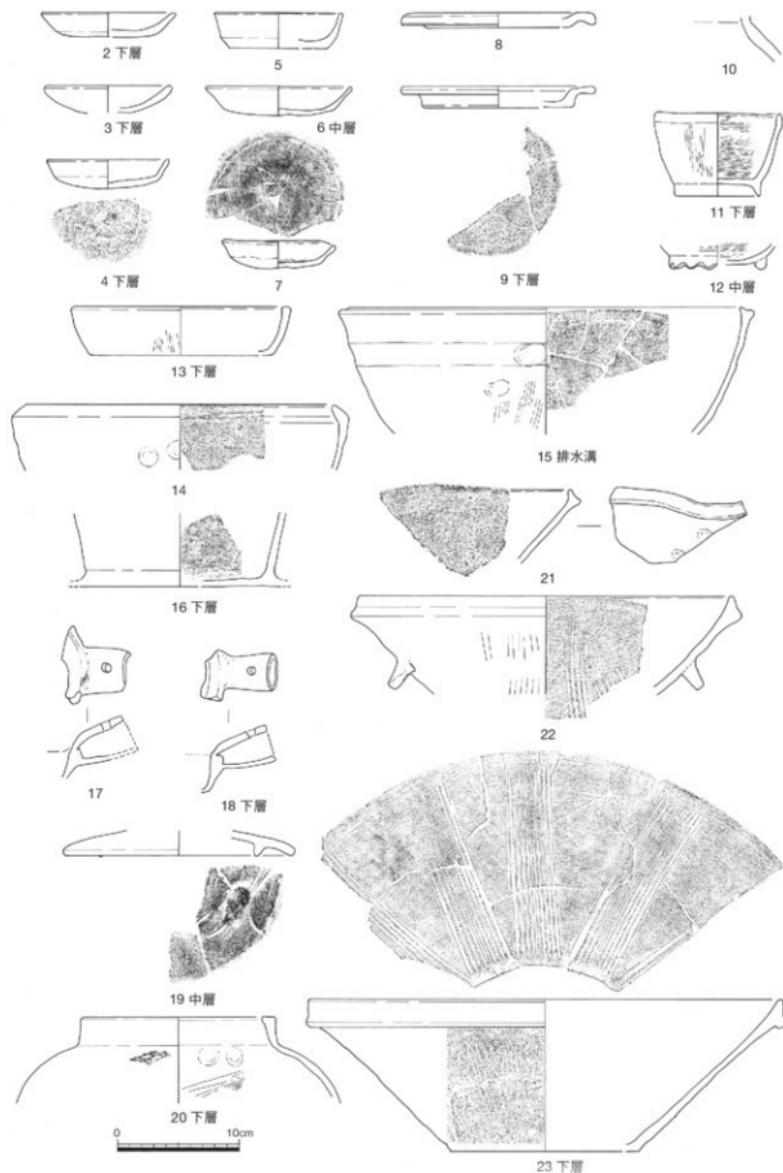
第8図 窓1 第1床面 (1/20)

は蓋で、20は羽釜である。21～23は擂鉢で、把手が付くものもある。鉗目は体部内面と底部に施す。24～36は鍋で、外面を荒いハケ目、内面を細かいハケ目で調整し、ヘラガキを有するものもある。26は口径に比して底が浅く熔接とも呼びうる形態で土師質に近い。37～39は壺である。37は須恵質で外面にタタキを施し、39のような口縁部が内傾し端部に面をもつ形態は大原焼の「壺」に似る。40～48は内耳鍋で、外面を荒いハケ目、内面を細かいハケ目で調整し、ヘラガキを有するものもある。14・49・50は火舎で、49は須恵質である。51は土坑7出土の62の把手に相当する。C1・2は焼台で窯道具である。C3は土鍤である。C4は高杯の脚のような形態をしており、裏面にコゲが付着することから窯道具の可能性がある。C5は筒状土製品で、粘土板を丸めて整形している。M1は銅錢で、初鑄年A.D.1023年の天聖元寶である。

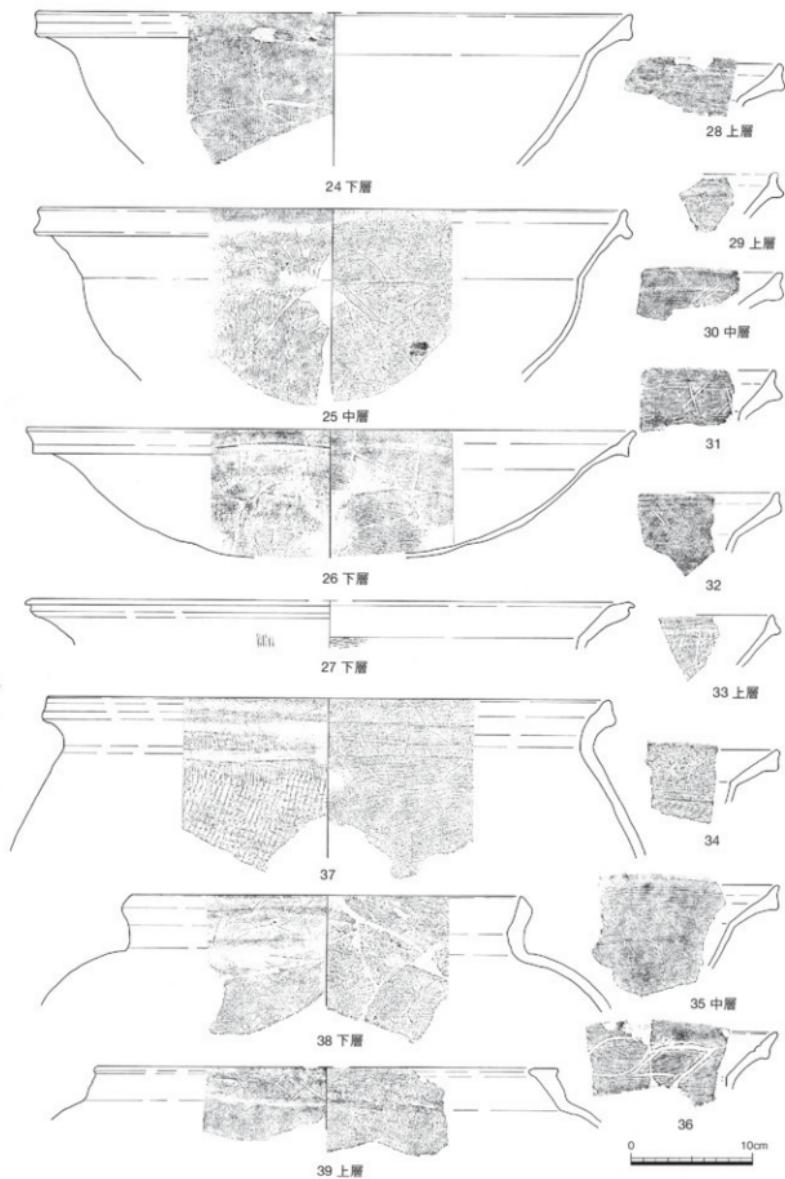
自然遺物として炭化物があり、燃焼時の薪の残渣と思われる。確認できる限り、広葉樹と思われる直径0.3～1.5cm程度の枝状のものとブナ科の種子がある。
(山本)



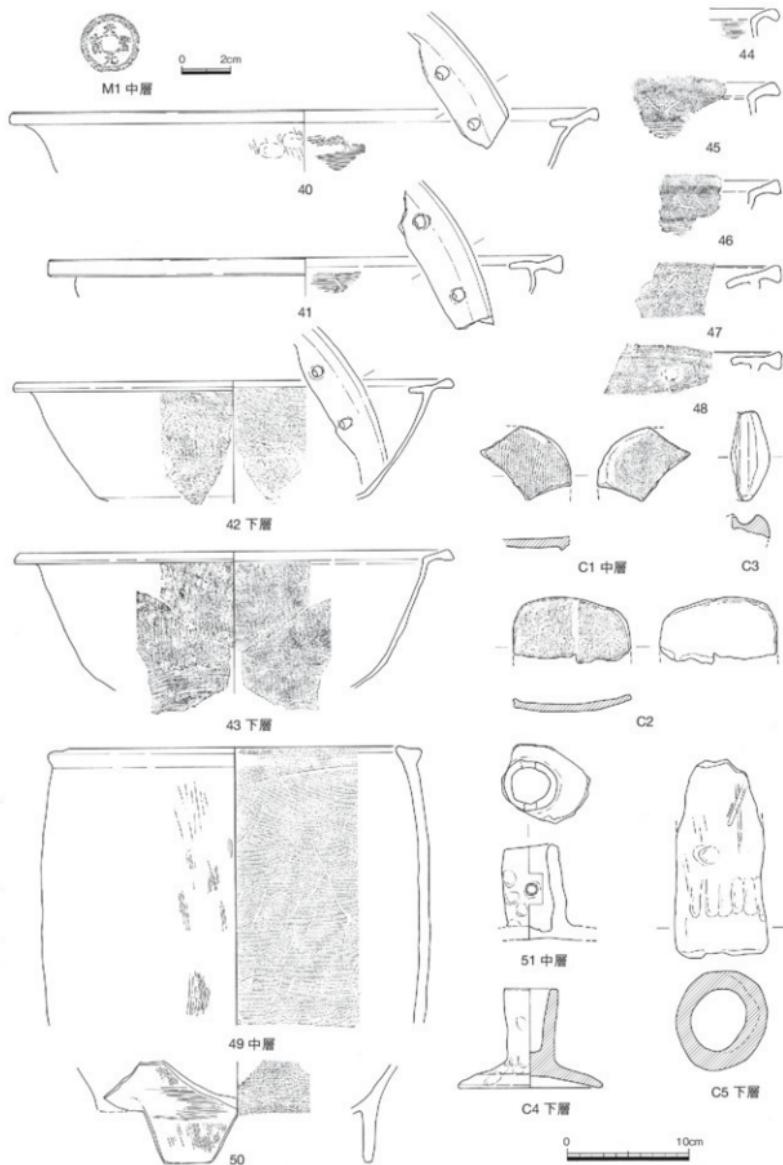
第9図 窯1 第2床面・焚口の石裏面 (1/20)



第10図 窯1出土遺物① (1/4)



第11図 窯1出土遺物② (1/4)



第12図 窯1出土遺物③ (1/2・1/4)

2 挖立柱建物

掘立柱建物 1 (第13図、図版3-1)

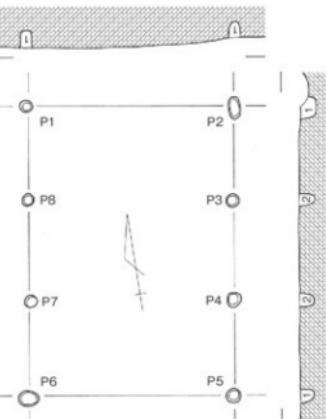
I区中央部の尾根上、耕作土直下の基盤面において検出された梁間1間（柱間430cm）×桁行3間（柱間200cm）の掘立柱建物である。柱穴はいずれも直径20~30cmと小規模なもので、東約4mに近接する窯の埋土である（暗）褐色粘質土と酷似した土砂で埋没していた。また、埋土中からは細片ながら窯出土の瓦質鍋に酷似したものも認められた。これにより、二者は共存していたことが考えられ、建物は窯との関係から工房として機能していた可能性が考えられる。
(島崎)

3 埋甕

埋甕 1 (第14図、図版3-2)

I区北壁の調査区境内に標高37.80mにおいて検出されたもので、掘り方に甕が密着した状態であったことから意図して埋め置かれたものと考えられる。

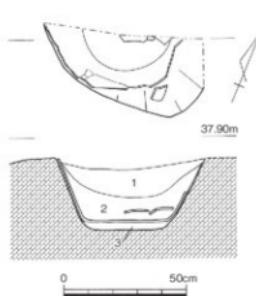
甕は、体部上半を欠損しており、口縁部等は不明であるが、底径40cmを測る大型のもので、体部外面には5mm前後の格子のタタキ目が、内面には横方向のハケメが明瞭に残る。



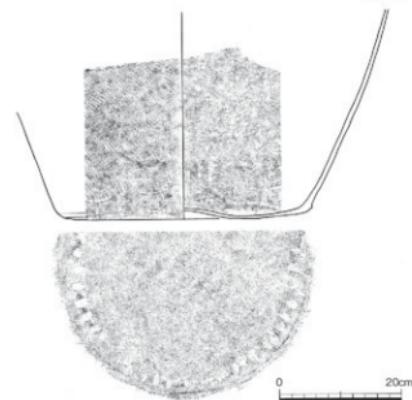
1 褐色 (10YR4/6) 粘質土
2 暗褐色 (10YR6/6) 粘質土

第13図 掘立柱建物 1 (1/100)

(島崎)



1 にじい褐色 (7.5YR5/4) 砂質土
2 赤褐色 (5YR4/8) 砂質土 (炭含)
3 鍋灰色 (7.5YR4/1) 粘質土



第14図 埋甕 1 (1/20)・遺物 (1/8)

4 土坑

土坑1（第6図）

I区北端の尾根筋から東側にやや下がった位置にある土坑である。北半分は調査区外に延びているため正確な規模は不明であるが、平面形は直径148cm程度の不整円形である。検出面からの深さは30cmを測り、皿状の床面を呈する。土器と炭片を包含する埋土が2層あり、上から灰褐色粘土、褐色土である。出土遺物は瓦質土器の鍋・擂鉢・火舎があり、それらの特徴から土坑1の時期は17世紀前葉であると考えられる。

(山本)

土坑2（第6図）

I区北端に位置する土坑で、土坑1の東側に近接している。北半分は調査区外に延びているため正確な規模はわからないが、平面形は直径50cm程度の円形を呈する。検出面からの深さは85cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平らである。埋土は3層に分けられ、上層から黄褐色砂質土、褐色粘質土、黄褐色粘土である。上の2層には土器と炭片を包含する。出土遺物は瓦質土器の鍋で、時期は17世紀前葉から17世紀中葉である。

(山本)

土坑3（第6図）

I区北側に位置する。平面形は不整な方形を呈しており、長辺180cm、短辺170cm、検出面からの深さ15cmを測る。土坑の底部には厚さ5cm程度の灰色を呈する粘土が人為的に貼り付けられていた。土坑の性格は不明であるが、土坑4・6・7とともに、窯1での土器生産に関連する遺構の可能性もある。出土遺物はなく、詳細な時期については不明であるが、周辺の土坑と同様に、16世紀後半から17世紀に属するものと考えられる。

(石田)

土坑4（第6図）

I区北側に位置し、土坑3の南東部に接している。平面形は方形を呈しており、長辺140cm、短辺130cmを測る。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは15cmであった。土坑の底面には厚さ5cmの灰色粘土が貼り付けられており、土坑3・6・7と同様の性格が想定される。

出土遺物はなく、詳細な時期については不明であるが、周辺の土坑と同様に16世紀後半から17世紀のものと考えられる。

(石田)

土坑5（第6図）

I区中央、掘立柱建物1のすぐ北側に位置し、土坑の南東部から溝3が窯1の方向に向かって伸びている。平面形は不整な方形を呈し、長辺165cm、短辺115cm、検出面からの深さは15cmを測る。付近の土坑3・4・6・7とは異なり、底面に粘土の貼り付けは認められなかった。

埋土中からは、破片であるが瓦質土器の鍋、内耳鍋、火舎が出土している。土坑の埋没した時期については、出土遺物から16世紀後葉と考えられる。

(石田)

土坑6（第6図）

I区北側、土坑4の南東5mに位置する。平面形は長方形を呈しており、長辺240cm、短辺155cm、検出面からの深さ16cmを測る。土坑3・4・7と同様の構造で、底面には厚さ5cmの灰色粘土が貼り付けられていた。なお、土坑の中央部にピットが2個存在するが、底面の粘土を除去した段階で土坑に切られた状態で検出しており、土坑に直接伴うものではないと考えられる。土坑の埋土中から瓦質土器の鍋や擂鉢が出土しており、時期は16世紀後葉から17世紀前葉と考えられる。

(石田)

土坑7（第6・15・16図、図版3-3・7）

I区北側に位置し、土坑6の南側に接している。平面形は不整な隅丸方形で、長辺200cm、短辺は180cm、検出面からの深さ18cmを測る。断面形は皿状を呈しており、土坑3・4・6と同様に底面には厚さ5cm程度の灰色粘土が貼り付けられていた。土坑の性格は不明であるが、底面に粘土を貼り付けた土坑は、水槽としての利用を想定した例が他遺跡でも認められる。また、窯1での土器生産に深く関わる遺構であった可能性も考えられる。

土坑の埋土中からは多くの瓦質土器が出土しており、その一部を第16図に示した。53は皿、54・55は鉢、56・57は火舎、58・59は擂鉢である。60・61は内耳鍋で、60の内耳内面にはヘラガキで「×」を二つ並べて印している。また、外面には煤が付着し使用痕跡が認められる。62は器形が鉢状を呈するが、底部中央から上方に筒状の把手が伸び、穿孔が認められる。これまでに類例のない器種で、その用途については不明である。

これらの遺物は土坑の本来の機能を終えた後、廃棄されたものと考えられる。土坑の埋没した時期は16世紀後葉から17世紀中葉と考えられる。
(石田)

土坑8（第6図）

土坑8はII区北西部に位置する。平面形は、長軸約1.5m、短軸約1.0mの楕円形を呈する。検出面からの深さは37cmを測る。壁面は垂直に近く立ち上がり、底面は平らである。埋土中に瓦質の内耳鍋の破片が混入しており、その特徴から土坑8の時期は18世紀以降と推定される。
(物部)

土坑9（第6図）

土坑9はII区北西部に位置する。西半部分は調査区外に延びており、北側と南側を土坑10・11によって切られていることから、その規模や形状は不明である。検出面からの深さは、約40cmを測る。埋土中には地山ブロックが多く見られ、埋め戻された可能性が高い。

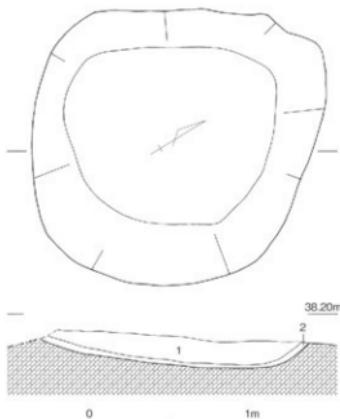
時期は、埋土に混入していた瓦質の鍋や擂鉢、羽釜の破片の特徴から17世紀前葉から中葉以降と考えられる。
(物部)

土坑10（第6図）

土坑10はII区北西部に位置し、土坑9を切っている。西半部が調査区外に延びているので正確な形状は不明であるが、直径1.5mほどの不正円形を呈する浅い皿状の土坑と推定される。時期は土坑9との切り合い関係から17世紀中葉以降と考えられる。
(物部)

土坑11（第6図）

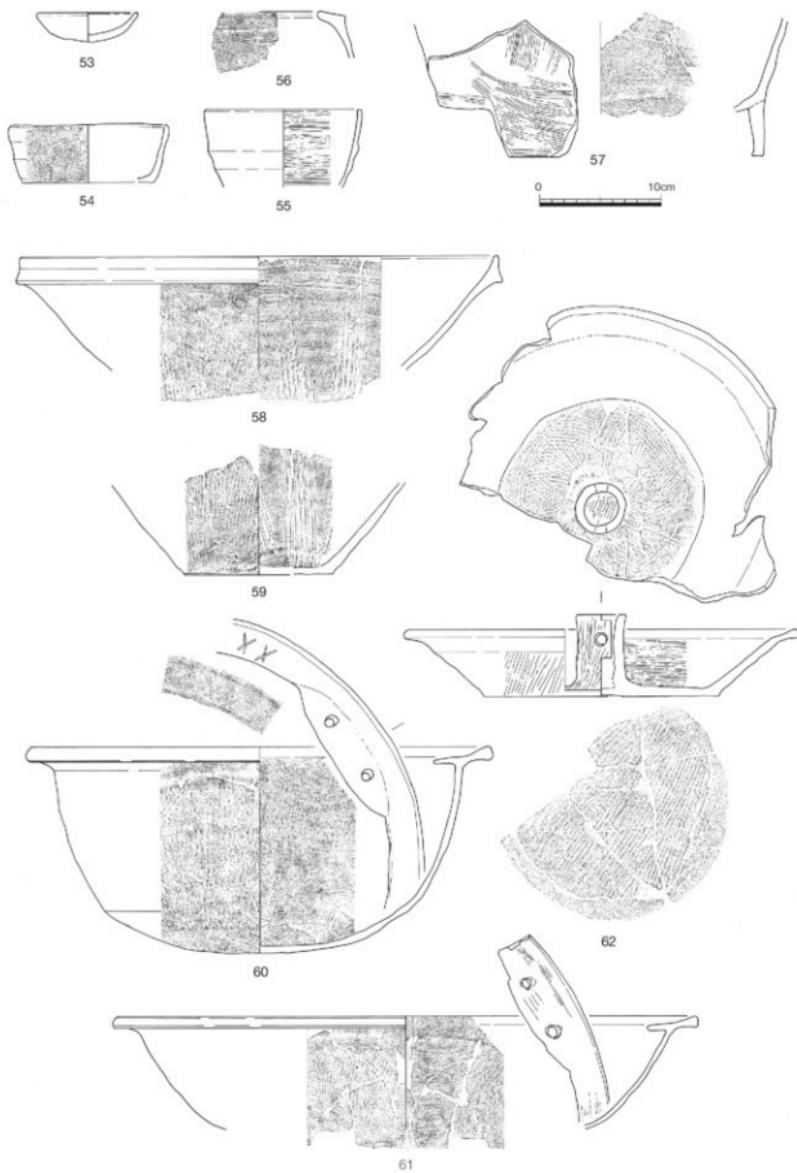
土坑11はII区北西部に位置し、土坑9を切る。土坑の大部分が調査区外となるため、形状など不明な点が多い。埋土上半には地山ブロックを多く含むことから埋め戻された可能性がある。出土遺物は無いが、時期は土坑9との切り合い関係から17世紀中葉以降と考えられる。
(物部)



1 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘質土

2 灰色(10YR7/1) 粘土

第15図 土坑7 (1/30)



第16図 土坑7出土遺物 (1/4)

土坑12（第6図）

土坑12はⅡ区南西部に位置する。土坑の西～南側は土坑13に切られており、土坑15との切り合い関係は不明である。西側は調査区外になるので、詳しい形状や性格などは不明である。検出面からの深さは20cm程度である。埋土中から土器片が少量出土した。瓦質の鍋、擂鉢、鉢、火舎などの破片が見られる。それらの特徴から、土坑12の時期は17世紀前半頃と推定される。

(物部)

土坑13（第6・17図、図版8-1）

土坑13はⅡ区南西部に位置する。土坑12を切っている。斜面を緩い弧状に掘削して、平坦面を造っていると考えられる。西側は調査区外に延びており、東側は土坑14と重なっている。検出された平坦面の東西幅は約5m、南北約2mを測る。平坦面は水平ではなく、斜面下方へ僅かに下がっている。柱穴や被熱などは確認されなかった。埋土中から整理箱7箱分の土器片が出土した。瓦質の鍋、鉢が多い。鍋などの外面に煤が付着しているものが見られる。また、瓦質ではあるが、断面が黄橙色を呈し、外面がやや黒ずんだような色調の土師質様の個体も多い。第17図63～66は瓦質の皿である。側面の内外は回転ナデを施し、底部内面は静止ナデ、底部内面は押圧の凸凹が見られる。63のみ色調が明るく浅黄色(2.5YR7/3)を呈する。67～70は小形の鉢である。底部が平らで、口縁端部が肥厚する特徴があり、板状の脚が3方向に付くものと、把手が付くもの、何も付かないものの3種類がある。調整は底部外面に粗いハケ目、内面に細かいハケ目を施している。68の底部外面には煤が付着している。71鉢は器壁が薄く、外面は継ハケ後、押圧が著しい。内面は横ハケである。72鍋は底部が平らである。色調は外面灰黄色(2.5Y6/1)、内面灰白色(2.5Y7/1)、断面にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。煤の付着は不明である。73は火舎である。色調は外面褐灰色(10YR1/4)、内面灰色(7.5Y6/1)、断面灰白色(N7/)を呈する。底部外面はハケ目調整である。出土した土器の特徴から、土坑13の時期は16世紀後葉から17世紀中葉頃と推定される。

(物部)

土坑14（第6図）

土坑14はⅡ区南部に位置する。土坑13とは切り合い関係にあると考えられたが、明確に分層することができなかった。土坑13と同様に平坦面を造成していると推定される。床面はほぼ水平であり、80×90cmほどの方形の範囲に厚さ3～5cmの白色の粘土が敷かれていた。その直上に黒色の薄い粘土層が見られた。埋土は、斜面上方に当たる北側から流れ込んだ様な堆積状況を示し、土器片もその中に多く混入していた。整理箱2箱分が出土した。器種は鍋、鉢、釜、皿、甕などがあった。これらの特徴から、土坑14の時期は16世紀前葉から中葉頃と推定される。

(物部)

土坑15（第6図）

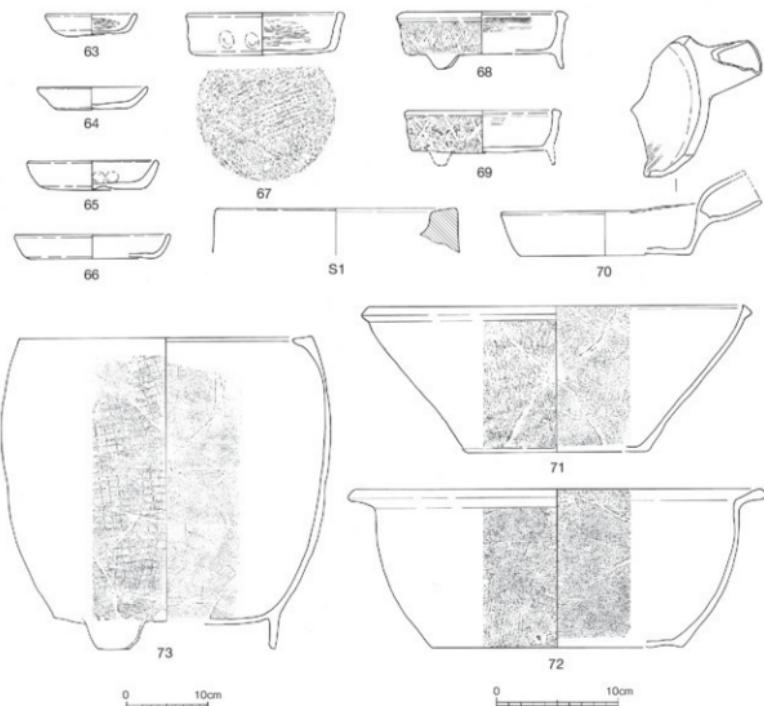
土坑15はⅡ区南西部に位置し、平面形は直径約3mの円形を呈し、検出面からの深さは約35cmを測る。底部付近で拳大の礫が5～6個検出された。埋土中から鍋や鉢などの瓦質土器片が少量出土した。その特徴から土坑15の時期は16世紀前葉から中葉以降と推定される。なお、この土坑を掘り上げた面で、長軸60cm以下で深さは40～30cmの不正形な土坑が3基検出された。この内部には炭や焼土塊、地山塊が充填しており、周辺で火を焚いた可能性がある。

(物部)

土坑16（第6図）

土坑16はⅡ区南部に位置する。土坑14を切っている。北側には直径約50cm、検出面からの深さ約25cmの別の土坑があり、これに切られている。埋土中に3袋程度の土器片が混入していた。瓦質の鍋、釜、鉢が見られ、その特徴から土坑16の時期は16世紀後葉から18世紀前半と推定される。

(物部)



第17図 土坑13出土遺物 (1/4・1/6)

土坑17（第6図）

土坑17はII区南部に位置する。土坑18に切られる。平面形は1辺1.5m程度の不正方形を呈する。混入した瓦質の内耳鍋の特徴から、土坑17の時期は17世紀後葉以降と推定される。
(物部)

土坑18（第6図）

土坑18はII区南部に位置し、土坑17を切っている。壁は掘り鉢状に傾斜しているが、東側に小さな段を造りだしている。その段の前面に拳大よりやや大きめな石を4～5個直線的に並べている。底面直上に薄い粘土層が見られたので水を溜めていた可能性があるが性格は不明である。埋土中に混入した内耳鍋などの特徴から土坑18の時期は18世紀前半以降と推定される。
(物部)

5 被熱面**被熱面1（第6図）**

I区南東部に位置する。溝4に切られているため正確な規模は不明であるが、長径21cm、短径11cmの長楕円形の範囲が被熱により赤褐色(2.5YR4/6)に変色している。明確な掘り込みや付属する建物等は見つかっていない。溝4に先行することから、16世紀後葉以前に形成されたものである。
(山本)

6 溝

溝1（第6・18・19図、図版3-4・8-2）

溝1はI区の南西部に約18mに渡って検出された。尾根の等高線に沿うように北から東方向へ弧状に湾曲している。溝の北端部は流出により、東端部は畠地の造成により、その先が不明である。

溝の上幅は推定で約2m、底幅は70cm前後を測り、断面形は逆台形を呈する。溝の底部東側に約5.5mにわたって石列が検出された。溝底部西側には見られず、部分的な造作である。溝の断面を観察すると、底面上に粘土層や砂層など水性堆積と判断できる土層は認められず、地山塊を含む砂質土層があり、その層の上面がほぼ水平になっていることから、水路ではなく、道であった可能性がある。石列は、この層の上に置かれている。山側から崩れてくる土をこの石列で簡単に止めていたのではないかろうか。埋土下層から整理箱6箱分の土器片が検出された。これら土器片の中に少量陶磁器が含まれていた。82は青磁の輪花皿、83は青磁碗、84・85は施釉陶器で、唐津の椀・皿と推定される。84の釉は白っぽい緑色を呈し、85は胎土目で、灰白色（2.5Y8/2）の釉に消えかかっているが黒色の模様がある。これらの土器の特徴から、溝1は17世紀中葉には機能を停止していたと思われる。78皿には片口部に油煙が見られる。79は皿か。86・87は蓋、C6は不明、C7・8は鍋を打ち欠いた円盤である。

(物部)

溝2（第6図）

I区東半に位置する溝で、西北方向からゆるやかに湾曲しつつ段上遺構上部へと続く。溝上方では幅170cm、深さ20cmを測るが、段上遺構との接続部付近においては幅60cm前後、深さ5cmとなる。出土遺物は瓦質土器の鍋・内耳鍋・擂鉢・羽釜・火舎で、時期は16世紀後半から17世紀初頭である。焼土塊の存在から窯1や段状遺構1と並存する可能性がある。

(山本)

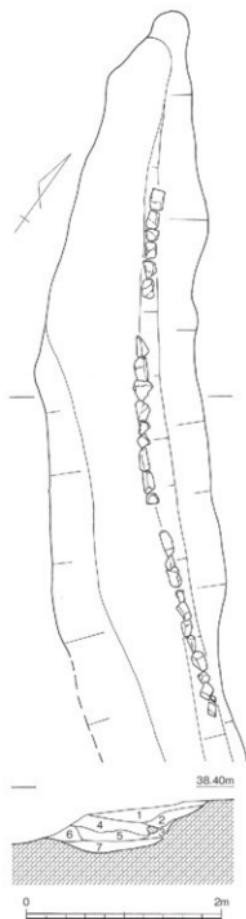
溝3（第6図）

I区中央部に位置する溝である。土坑5の南東部から派生してゆるやかに湾曲しつつ南方へと延びる。溝上方では幅102cmを測るが、下方では幅19cmと次第に細くなるとともに深さも減じる。埋土は土器を包含した灰黄褐色砂質土の一層のみである。出土遺物は瓦質土器の鍋・擂鉢・皿、青磁の碗で、時期は16世紀後葉から17世紀中葉と考えられる。

(山本)

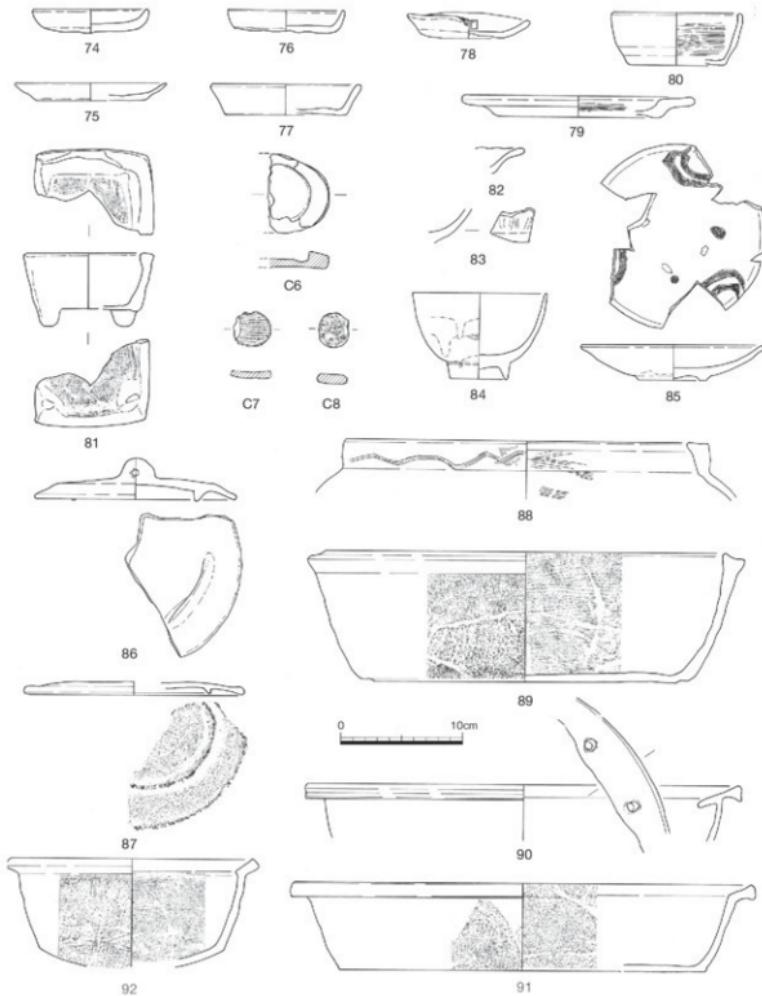
溝4（第6図）

I区南東部に位置する溝で、南西一北東方向にほぼ直線的に延



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土 (地山ブロック含)
- 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土 (地山ブロック含)
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (地山ブロック含)
- 4 褐灰色 (10YR4/1) 粘土質土
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土
- 6 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
- 7 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土 (地山ブロック含)

第18図 溝1 (1/50)



第19図 溝1出土遺物 (1/4)

びている。全長380cm、最大幅82cm、深さは17cmを測る。出土遺物は瓦質土器の鍋、内耳鍋、擂鉢で、時期は16世紀後から17世紀中葉である。窯1の排水溝を切っているが、出土土器からみた年代差は認められない。

(山本)

溝5（第6図）

溝5はI区南端部に位置する浅い溝で、溝1を切っている。耕作に伴う溝と推定される。（物部）

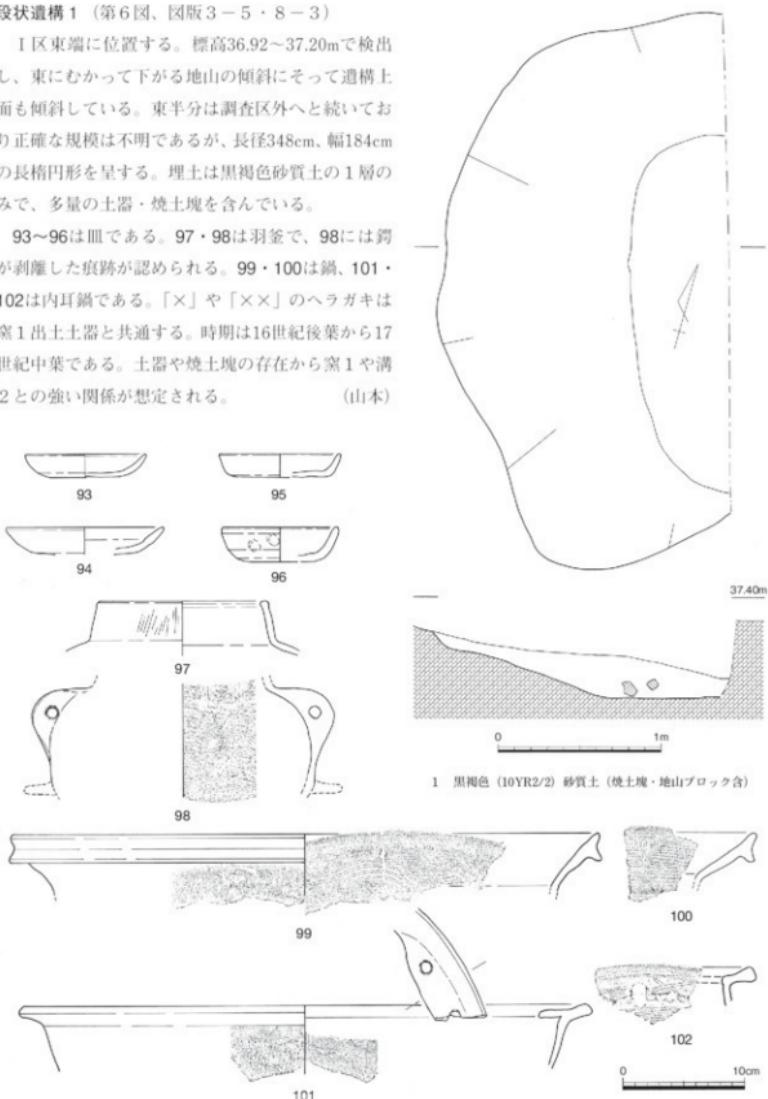
7 段状遺構

段状遺構1 (第6図、図版3-5・8-3)

I区東端に位置する。標高36.92~37.20mで検出し、東にむかって下がる地山の傾斜にそって遺構上面も傾斜している。東半分は調査区外へと続いており正確な規模は不明であるが、長径348cm、幅184cmの長楕円形を呈する。埋土は黒褐色砂質土の1層のみで、多量の土器・焼土塊を含んでいる。

93~96は皿である。97・98は羽釜で、98には鉢が剥離した痕跡が認められる。99・100は鍋、101・102は内耳鍋である。「×」や「××」のヘラガキは窯1出土土器と共に通する。時期は16世紀後葉から17世紀中葉である。土器や焼土塊の存在から窯1や溝2との強い関係が想定される。

(山本)



第20図 段状遺構1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第4章 自然科学的分野における分析・測定

第1節 里見山中遺跡出土土器の胎土分析

1 はじめに

里見山中遺跡で調査された窯1より出土した瓦質土器の自然科学的な胎土分析を実施し、この窯で生産された土器がどこで消費されていたのかを目的として分析を行った。今回の分析では、浅口市鴨方町に所在する沖の店遺跡の2区溝・4区包含層から出土したほぼ同時期の遺物及び、中世須恵器の生産地で知られている亀山焼と比較することにより瓦質土器の産地推定に向けての基礎データとした。分析は蛍光X線分析法を用い、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から各分析試料の差異について調べた。測定した成分（元素）は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zrの13成分である。なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：SEA5120A（エスアイアイ・ナノテクノロジー社製）を使用した。

測定条件：X線照射径2.5mm、電流50~200mA、電圧50kV/15kV、測定時間300秒、測定室は真空の条件で測定した。

測定元素：13成分の定量値は地質調査所の標準試料JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、JR-1（流紋岩）、JB-1a（玄武岩）、JF-1（長石）の5個の試料を用いて検量線を作成し、定量値を算出した。

測定試料：分析試料は、土器表面の汚れを除去後（研磨機）、乾燥した試料を乳鉢（タンクステンカーバイト製）で粉末（100~200mesh）にしたものを加圧成形機で約15%の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる成分を横軸と縦軸にとり、散布図を描き、各遺跡（窯跡）にまとまりがあるか検討した。

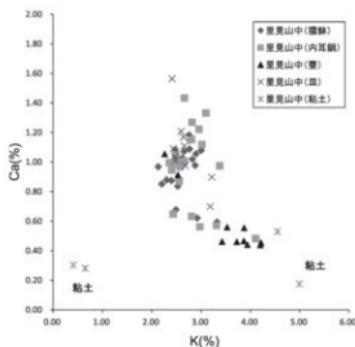
2 蛍光X線分析結果

この分析では測定した13成分のうち、中世須恵器の分析試料に顕著な差がみられたのは、Ca、K、Tiの3成分であった。したがってK-CaとK-Tiの散布図を作成し、各遺跡出土鉢の生産地推定を行った。第21図K-Ca、第22図K-Ti散布図では、里見山中の窯内出土の遺物で、器種ごとで胎土に差がないか調べた。その結果、甕がまとまり、胎土がやや異なる傾向があったが窯全体の分布ではほぼまとまる。なお、遺跡内の土壤（粘土）を分析したところ土器とは一致しなかった。

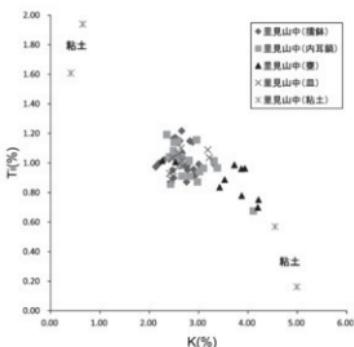
第23図K-Ca、第24図K-Ti散布図は、窯跡である里見山中と亀山焼の胎土を比較したものである。この散布図より両窯跡とも一部重なるが、里見山中の胎土にCaとTi量が多く含まれており識別できる。

第25図K-Ca、第26図K-Ti散布図は、窯跡の分布図に沖の店遺跡出土の土器をプロットしたものである。この結果から、沖の店出土のほぼすべてが、里見山中と胎土が一致しすることが推定された。なお、沖の店の一部の甕（試料番号42・43・44・45・60）が亀山の領域に分布した。

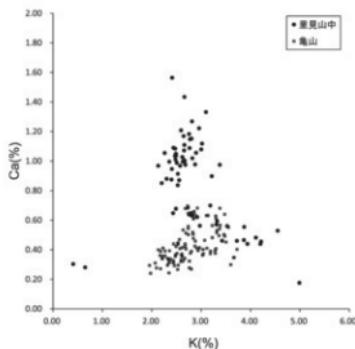
以上のように、里見山中の窯1で生産された瓦質土器は、沖の店で消費されていることが推定された。また、沖の店出土の甕には亀山焼も一部、入っていることも推定された。
(白石)



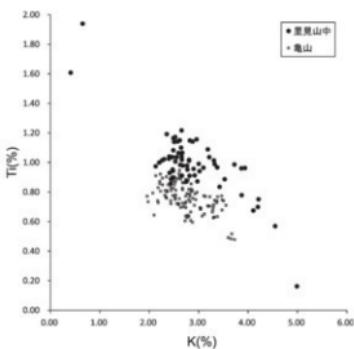
第21図 窯1器種別の比較 (K-Ca)



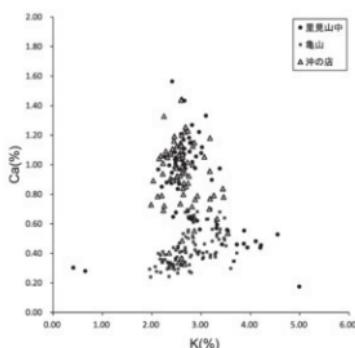
第22図 窯1器種別の比較 (K-Ti)



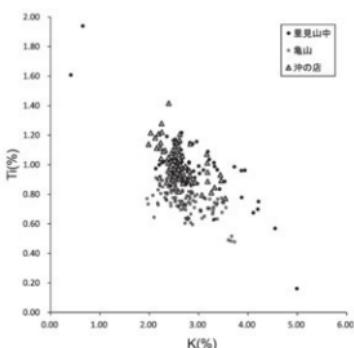
第23図 窯跡の比較 (K-Ca)



第24図 窯跡の比較 (K-Ti)



第25図 窯跡と遺跡出土土器の比較 (K-Ca)



第26図 窯跡と遺跡出土土器の比較 (K-Ti)

第2節 里見山中遺跡窯1の古地磁気学的測定

地球磁場（地磁気）は長い時間をかけて変化する。この変化（地磁気永年変化）には規則性がなく、場所ごとにも異なる。地磁気永年変化の様子は地域ごとにまとめられ、全地球的なモデルも提唱されている。里庄町付近では現在、伏角（地磁気方位ベクトルの水平面からの下向き角）が約49.0度、偏角（水平面内の真北からのずれ）が西偏約7.3度であるが、過去の日本ではこの角度が1世紀につき数度の変化をしてきたことが広岡（1977）などによってまとめられている。逆に時代が不明な被熱考古資料に関して、その熱残留磁化を古地磁気学的に測定して当時の地磁気方位を復元し、標準曲線と比較することで年代推定をすることも行われている（考古地磁気年代推定法）。本節では、里見山中遺跡で見つかった窯1から採取した試料について古地磁気学測定を行い、その年代等について議論する。

我々は2013年5月30日に里見山中遺跡にて、窯1の第1床面の傾斜部及び左右の壁面から8つブロックを採取した（ブロック番号1, 4, 5は床面傾斜部、2, 3は右壁面、6, 7, 8は左壁面から）。なお、各ブロックの方位付けには磁気コンパスを使用したが、当日は曇天のため太陽コンパスによる現在の地磁気偏角値は測定できなかったため、国際標準地球磁場値（7.28度西偏）を用いて真北方位を決定した。各ブロックから3つずつの試料を切り出し、スピナー磁力計にて古地磁気方位を測定した。それぞれの古地磁気測定は0~100mTまで19段階の段階交流消磁を施しながら行い、結果について主成分分析法を用いて安定な古地磁気方位を決定した。

結果として、8ブロックのうち床面傾斜部から採取したブロック5の3試料については安定な残留磁化方位を得ることができず、また、ブロック4の3試料については、方位は安定であるものの他と比べほぼ正反対の方位であった。この2つのブロックは少しの隙間をもって隣り合わせであるが、崩落した天井の破片もしくは土壌であると推測される。ブロック4の部分は最終操業の冷却後崩落する時に形を保ったままひっくり返り、ブロック5の部分は冷却中に落ちたか天井とは異なる土壌を採取した可能性が挙げられる。残り6ブロック18試料からは、安定な残留磁化方位を得ることができたが、その結果を等面積投影図法上にプロットしたものが第27図である。平均方位は偏角2.3度東偏、伏角43.6度、集中度バラメータ533.0、平均方位の95%信頼限界1.5度となった。古窯の古地磁気結果としては妥当な集中度である。

次に、標準的な日本における地磁気変化曲線との対比をする。使用したモデルは広岡（1977）とHatakeyama et al. (in prep) の2つである。前者は長らく考古地磁気年代推定で使用されてきたもの、後者はその後のデータを追加して再解析したものである。今回対象となる時代ではこの2つのカーブはかなり特徴が異なるため、比較することで曲線の妥当性も検討できる。里見山中遺跡の古地磁気方位は広岡の曲線（第28図A）では曲線部2カ所と接近している。1400年付近と1750年付近である。一方Hatakeyama et al.の曲線（第28図B）では1800年ころが最も近い。土器から推定される16世紀後葉という年代観からはどちらも少し離れている。第28図Aでは上（伏角が浅い）方向へ9度、第28図Bでは右上（伏角が浅く偏角が東）方向へ5度ほどすれば良く重なる。

さらにデータへ立ち返って、方位データのばらつきについて考えてみる。第27図のデータの分布は確かに良い集中を示しているが、水平方向（図の円周方向）の分布が顕著である。個々の試料からの誤差が系統的でなければ、分布は等方的になることが期待される。逆に、分布の一方向への伸長は、窯

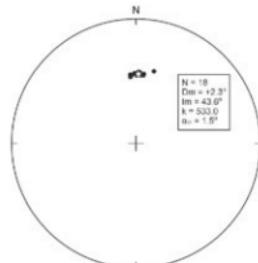
全体が残留磁化獲得後の影響を何等か受けていることを示している。一番の可能性は窯が放棄された後に変形したことによるものである。埋没し踏み固められた窯では壁面が重むることがあり、実際に残留磁化方位からその量を推定することもできる。本件の場合、窯の軸線がほぼ南方向傾斜なので、壁面が重み易い方向は東西であり、ほぼ北方向の磁化が埋没後の変形で東西方向へ変位することは妥当である。すると、一番変形が少ない床面の試料からの方位を議論する必要があるが、残念ながら上述したように、今回は床面傾斜部から採取した3ブロックのうち2つは床面そのものではないと考えられる。残ったブロック1の3試料の平均方位は偏角8.0度東偏、伏角43.0度(集中度バラメータ276.2、平均方位の信頼限界7.4度)であった。残念ながらこの値は参考程度のものであるが、第29図Bの曲線上では16世紀初頭のころと近くなる。

本研究で得られた古地磁気方位から推測される里見山中遺跡窯1の第1床面における焼成年代は、標準曲線から近い順に「1400年頃」、「1750年頃」、「1800年頃」、「16世紀初頭」と挙げてまとめとする。
(畠山)

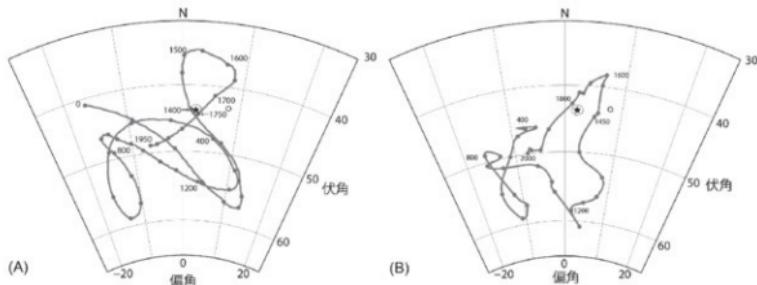
本測定は岡山理科大学「鉱物の物理化学特性から読み取る地球、惑星の環境変遷史」プロジェクトの一部である。測定に当たっては高知大学海洋コア総合研究センターの測定機器を使用した。

参考文献

- [1] 広岡公夫, 考古地磁気および第四紀考古地磁気研究の最近の動向, 第四紀研究, 15, 200-203, 1977.
- [2] Hatakeyama, T., H. Shibuya, K. Hirooka, H. Nakamura, A. Yoshihara, M. Yamamoto, M. Torii, A New Archeomagnetic Database and Geomagnetic Secular Variation Model for the past 2ky of Japan, (in prep)



第27図 窯1から採取した6ブロック18試料の古地磁気方位（黒丸）と平均（☆印）



第28図 永年変化曲線2種

((A)=広岡(1977),(B)=Hatakeyama et al.(in prep))上にプロットした、平均方位(★印)と床面ブロック1の3試料の平均方位(六角形)

第5章 総括

1 窯1出土土器の特徴と年代的検討

窯1出土土器の口縁部点数を整理した表2を見ると、内耳鍋・鍋・擂鉢が大半を占めていることが分かる。口径の大きさによる破片点数の出現偏差を考慮してもこの3器種が中心であることには変わりなく、窯1で主に生産していた器種と考えてよからう。内耳鍋・鍋・擂鉢はいずれも瓦質を基本としハケ目調整を多用する点で共通しており、いわゆる龜山系瓦質土器⁽¹⁾の特徴を有している。龜山系瓦質土器は、広島県福山市の草戸千軒町遺跡の調査成果をもとに研究が進められてきた〔鈴木1996〕。草戸編年において内耳鍋が出現するのはIV期後半新段階（15世紀末から16世紀初頭）であり、後出的な要素を持っている窯1の土器は、より新しい時期の所産と考え得る。全国的な傾向として内耳鍋が焰烙へと変化したことが指摘されており、龜山系瓦質土器の内耳鍋の変遷を整理することで窯1出土土器の年代を想定できそうである。

そこで里見山中遺跡周辺で出土した内耳鍋⁽²⁾の口縁部断面形態を12型式に分けると、I類からXII類への漸次的な変化が読み取れる（第29図）。I類は草戸編年IV期後半新段階に相当し、基準となるSD760では明応2（1493）年銘の卒塔婆が共伴する。16世紀第4四半期とみられる岡山城本丸下の段からはIV類が出土し、岡山城二の丸跡で1650～60年代とされる地層からVI類が見つかっている。その他、陶磁器・備前焼との共伴関係等を考慮して編年図を作成した（第30図）。

窯1からはIV・V・VI類が出土しており、16世紀後葉から17世紀中葉に営まれていたと推測される。窯1前庭部下層から採取した炭化物1点について実施した放射性炭素年代測定（AMS測定）の1618±25という結果もこのことを裏付けている（表3）。鍋と擂鉢について、鍋の屈曲部、擂鉢の卸目・片口といった属性が認められない限り口縁部のみでは判別がつかない。口縁部に面をもつものから次第に拡張して上方へつまみあげていくという変化が読み取れよう。

表2 窯1出土土器点数

器種	口縁部点数
内耳鍋	274 ⁽¹⁾
鍋	220 ⁽²⁾
擂鉢	273 ⁽³⁾
甌	8
皿	42
火舎	61
鉢	35
羽釜	18

(1) 内耳があり内耳鍋と分かるもの。(2) 屈曲部まで残る鍋と分かるもの。(3) 卸目・片口を有する擂鉢と分かるもの。



第29図 内耳鍋口縁部分類

表3 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-131171	350±20	95.69±0.28	332±25	1495calAD - 1528calAD (20.5%) 1551calAD - 1602calAD (35.2%) 1616calAD - 1634calAD (12.5%)	1482calAD - 1642calAD (95.4%)

ここで問題となってくるのが大原焼との関係である。これまでにも亀山系瓦質土器から大原焼への変遷がにわかに指摘されてきたが、資料の限界もあり実態は未解明ことが多い〔荻野1985、間壁1996、佐藤2001、乗岡2001〕。今回の調査成果によって当地での土器生産は16世紀後葉まで遡ることが判明したわけであるが、なにをもって大原焼と呼ぶのかという問題の解決は容易ではない。内耳の退化は極めてスムーズであり、内耳鍋はすべて亀山系瓦質土器の範疇と捉えてよかろう。製作技術上で大きな画期となるのは19世紀に導入された「外型整形」技法である。「外型整形」技法は、焰烙のみならず壺や宝殿、竈等の大原焼を代表する製品の製作にも用いられている。

史料において「大原」という地名が土器名に冠するようになるのは、明治2（1869）年の『浅口郡口林村大原炮礮商他行願』や同3年の『大原抱礮主法帳』にあるとおり明治初期からであって、それまでは単に「砂鍋」や「ほうろく」としか記されていない。「大原焼」にいたっては明治11（1878）年の『岡山県地誌略（二）』が初めてである。先の『浅口郡口林村大原炮礮商他行願』では36人のほうろく商が瀬戸内海沿岸へ借船で出かける状況が記されており、「大原焼」という呼び方は他の生産地と区別するという対外的な要因から成立したのではなかろうか。

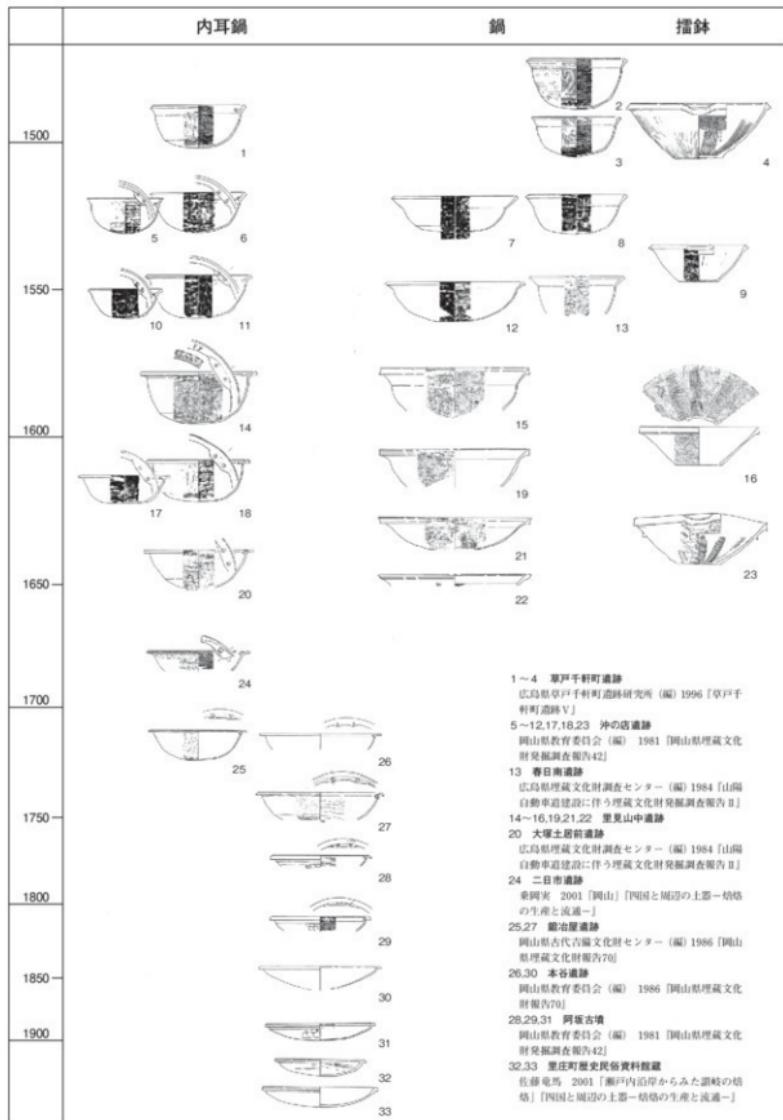
大原焼は焰烙を主力製品としていたことは確実であるが、第2章でみたとおり実際に豊富な器種を生産している。里庄町歴史民俗資料館には元禄12（1699）年銘をもつ宝殿が伝わっていることから、遅くとも1700年前後にはすでに様々な器種を生産していたことが判明している。宝殿だけでなく、その他の器種も含めた総合的な研究は今後の課題である。
(山本)

2 窯1の復元

ここでは窯1の復元を試み、その評価について述べてみたい。窯1には上下2つの床面が残っているが、第1床面は第2床面によって改変されている可能性があるため、後者の復元を行う。

窯1はいわゆる煙管状窯であり、焚口から燃焼部を地下、焼成部を地上に構築する半地下式構造をとる。焚口周辺の床面では、強い被熱によって硬化・変色しており、燃料を燃やした場所を示しているといえよう。その周囲は均一に熱を受けており、分焰柱やロストル、内窓のような施設の痕跡は認められない。また、床面が傾斜していることから直接土器を床面に設置して焼いたとは考えにくい。窯体自体は遺存しておらず上部構造は不明ながらも、焼台と思われる板状の土製品が出土していることを勘案すると、焼成室に火格子の存在が想定される。床面直上に落ち込んだ窯壁は直線的で平らな面をもっており、方形を呈する焼成部の平面形態を反映したものと思われる（図版2-2）。窯壁の外面には、漆喰のような白色の精製粘土が塗られたものもあり、風化防止を意図したものと思われる。

大原焼の窯には数種類が知られるが、の中でも「タコ窯（風呂窯）」と呼ばれる窯と多くの共通点が指摘できる。写真3はかつて妹尾家が所有していたタコ窯、通称妹尾勘次郎窯であり、平地に平面



第30図 主要3器種編年図

方形の窯体を構築し前面に焚口を設ける。焼成室内には煉瓦で火格子を二重に設け、その上に煉瓦の小破片と円形の焼台を配置している。恒常的な天井はもたず、解放された上部の開け閉めによって酸化焼成の「晴らし焼」と還元焼成の「黒焼」を焼き分けているといふ。窯1出土土器も、瓦質焼成を基本とするものの、須恵質や土師質と呼びうる焼成も見受けられ、同様の上部構造が想定される。

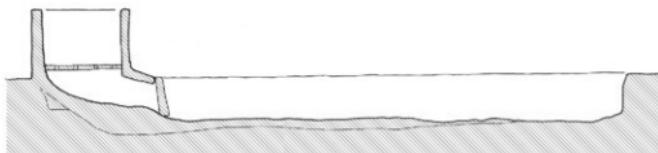
以上のことから想定される窯の復元図を第31図

に示す。なお、窯体の高さについては周辺遺跡から出土した瓦質の甕の高さを参考にした⁽³⁾。中世の煙管状窯が発展し、民俗例として知られる「桶窯」へと移行する過渡期的な様相を示しているといえよう。土器製作技法の系譜がたどれる亀山焼では窯窓を用いていることから、15世紀から16世紀の間に煙管状窯への転換が行われていることになるが、詳細は今後の調査成果に期待したい。(山本)



写真3 昭和60年前後の妹尾勘次郎窯

左 外観 里庄町教育委員会 (編) 1986より
右 内部 伊藤完氏提供



第31図 窯1復元図 (1/50)

謝辞

草戸千軒町遺跡出土遺物の資料見学にあたり、鈴木康之氏に御教示いただきました。記して御礼申し上げます。

注釈

- 「亀山系瓦質土器」は、12~14世紀にかけて倉敷市玉島神前社周辺を中心として作られた「亀山焼」の系譜を受け継いだ土器で、成形・調整技術において多くの共通点がある。亀山焼の初期は須恵質の土器を生産しており、しだいに瓦質の土器へと転換するようであるがその実態は未だよく分かっていない。
- X類やXII類のような口径に対して底の浅い土器は「焰烙」と呼びうる形態であるが、I類をはじめとする内耳鍋からの変化は漸次的であり、鍋と焰烙の明確な基準を持ち合わせていない現状では内耳をもつ土器を包括して内耳鍋と呼ぶことにしたい。また、XII類は内耳を有していないものの内耳鍋の系譜に位置づけられることから合わせて内耳鍋とする。なお、本書で使用する「焰烙」という用語は、炒ることを目的として製作され一般的な呼称として定着している土器を指す。
- 窯1から甕が出土しているが少数であり、胎土分析結果を勘案すると他の窯の製品が混入した可能性も考えられる。復元図の高さはあくまでも参考値である。

参考文献

- 荻野繁春 1985 「西日本の中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』第3号、福井考古学会
 坂本輝正 1990 「大原焼」里庄町制施行四十周年記念出版、里庄町
 佐藤竜馬 2001 「瀬戸内沿岸からみた瀬戸の焰烙」『四国と周辺の土器—焰烙の生産と流通—』関西近世考古学研究会
 里庄町教育委員会 (編) 1986 「1 大原焼」「里庄の文化財」里庄町
 鈴木康之 1996 「1 土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査V』
 乗岡 実 2001 「岡山」「四国と周辺の土器—焰烙の生産と流通—」関西近世考古学研究会
 間壁忠彦 1996 「奈良時代以降の遺跡」『新修食敎市史』第1巻考古

図版 1



1 調査地遠景
(北西から)



2 調査区Ⅰ区全景
(南から)



3 調査区Ⅱ区全景
(東から)

図版 2



1 窯1の堆積
(北東から)



2 窯1 第2床面
(東から)



3 窯1 土器出土状況
(南から)



1 挖立柱建物 1 (東から)



2 埋甕 1 (南から)



3 土坑 7 (東から)

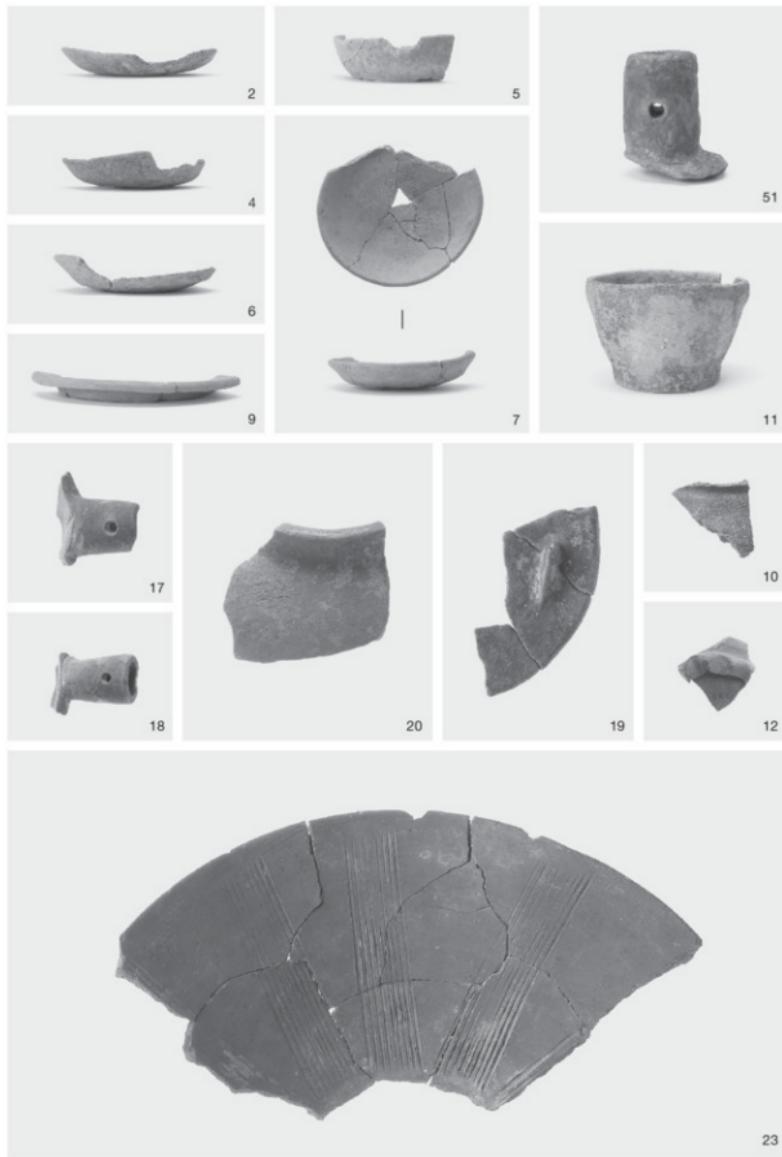


4 溝 1 (北西から)



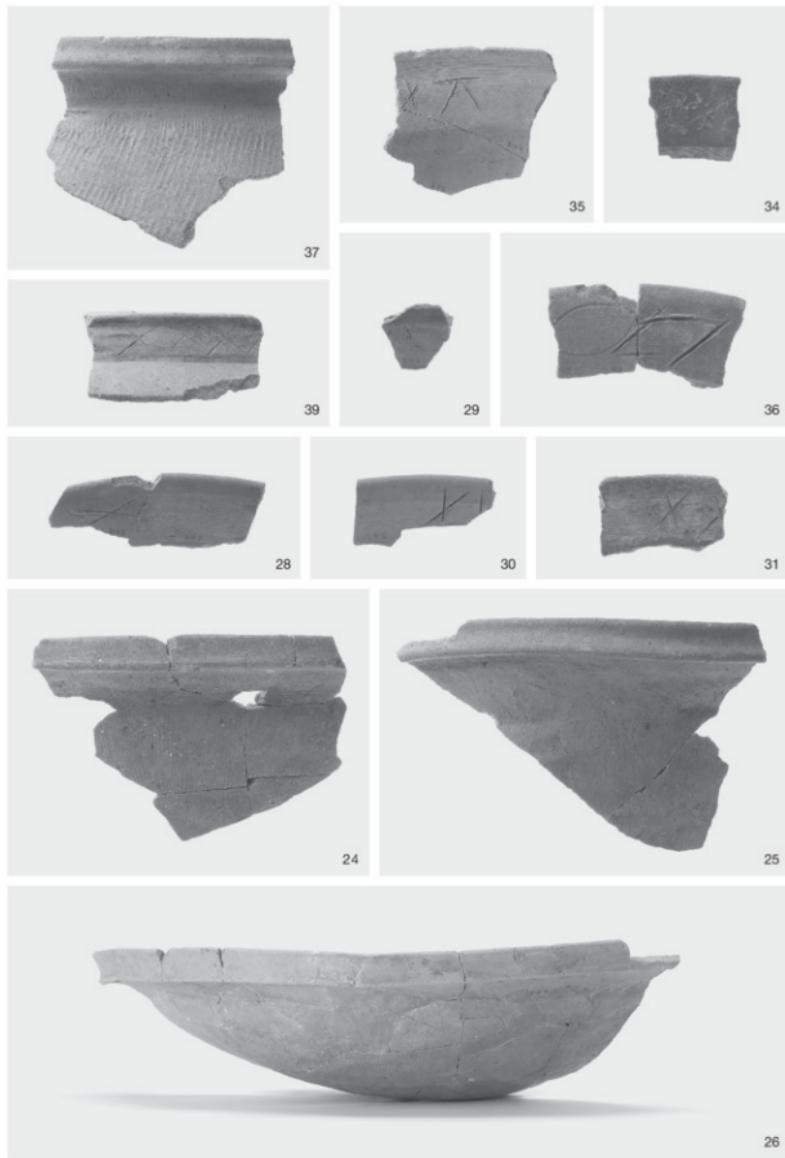
5 段状遺構 1 (北から)

図版 4



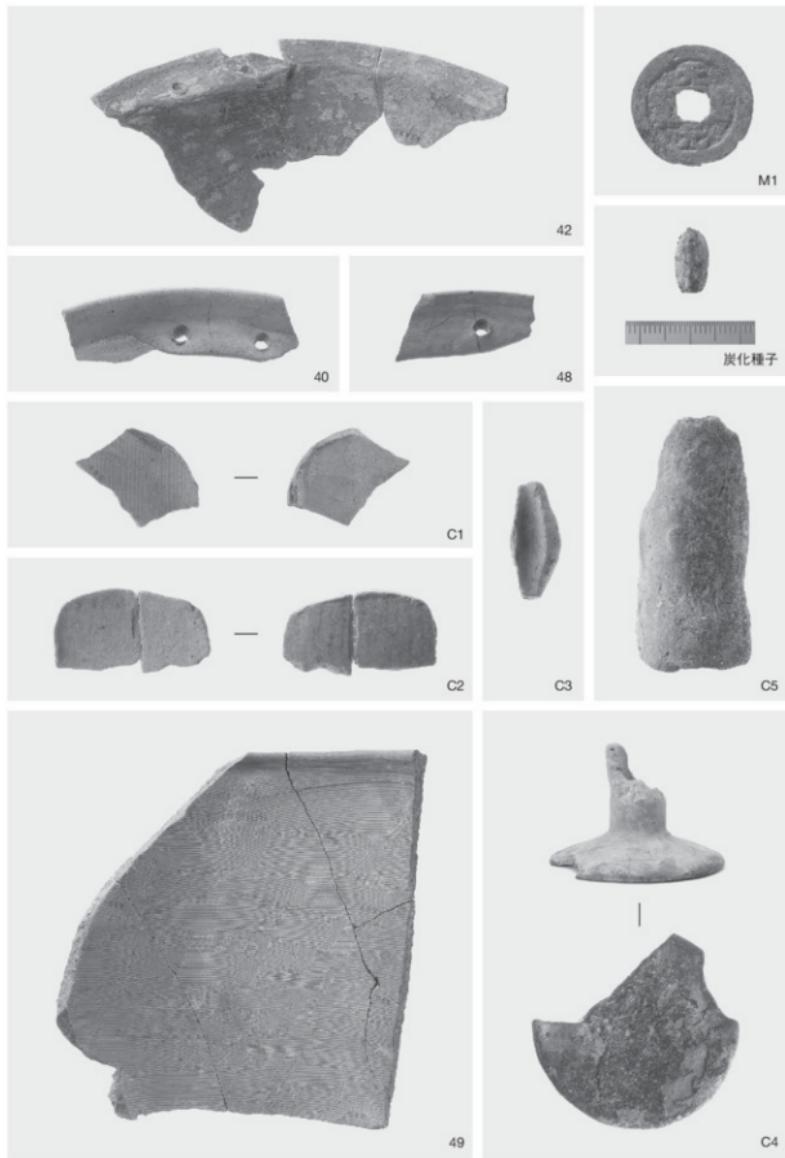
窯 1 出土遺物①

図版 5



窯 1 出土遺物②

図版 6



窯 1 出土遺物③



土坑 7 出土遺物

图版 8



1 土坑13 出土遗物



2 满 1 出土遗物



3 段状遗構 1 出土遗物

報告書抄録

里庄町埋蔵文化財発掘調査報告 1

里見山中遺跡

宅地造成工事に伴う発掘調査

平成26年3月31日 印刷

平成26年3月31日 発行

編集・発行 里庄町教育委員会
岡山県浅口郡里庄町里見1107-2

印 刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2